<table>
<tr><th></th><th>指針および視点</th><th>取組内容</th></tr>
<tr><td rowspan="5">研究内容Ⅰ（生徒）</td><td rowspan="5"><u>○指針１　児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動の設定</u>
Ａ　従来の教育課程で育成する資質・能力を基盤とし、さらなる充実・発展を意図した教育活動の質的向上を図る取組を実施すること。
Ｂ　自らの興味関心や学習上の課題等に対し、児童生徒が主体的に探究的な学習活動を選択・判断できる柔軟性のある教育活動を仕組むこと。
Ｃ　児童生徒や学校の実態及び地域がもつ特性や教育力を最大限に生かした教育活動の工夫を行うこと。
Ｄ　取組内容等を決定する際には、児童生徒の意見を聴取したり意思決定に参画したりするなど、児童生徒の自主性や主体性を高める工夫を行うこと。</td><td>ジブン学：S(Student)「ジブン深掘りタイム」　（視点 A,B,C に該当）
糸島や志摩地区の産業や人材を活用した探究的企業体験活動や大学と連携した探究的研究者体験活動を通し、生徒のチャレンジ精神や探究心等に加え、判断力や実行力、コミュニケーション力等の育成を目指す。</td></tr>
<tr><td>ジブン学：S(Student)「ジブン育成タイム」　（視点 A,B,C に該当）
生徒が自身の課題（教科や人間的側面、スキル等）を自覚し、その課題に応じて学習やスキルトレーニングを選択し、各自の課題解決を目指す。</td></tr>
<tr><td>ジブン学：S(Student)「放課後ジブンタイム」　（視点 B,D に該当）
放課後個人の選択的活動の時間として設定し、好きなように時間を使う。部活動参加や中庭でのおしゃべり、帰宅後習い事に行くなどが考えられる。</td></tr>
<tr><td>ジブン学：S(Student)「One School プロジェクト」　（視点 A,D に該当）
５月に行われる体育祭のブロックでの人間関係で行う学校行事やレクリエーション大会</td></tr>
<tr><td>ジブン学：S(Student)「オトナとお話 Week&Day」　（視点 B,C,D に該当）
担任に限らず、本人が話を聞いてほしい教職員を選んだり、学校外から話をしてみたい人を自ら探し出したりして、コミュニケーションを図り、自分の人生について考えるきっかけとする。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">研究内容Ⅰ（教師）</td><td rowspan="2"><u>○指針２　自ら学び続ける教師を目指した教職員の資質・能力の向上を図る取組</u>
Ａ　教職員自らの強みや課題意識に基づき、教職員が自ら企画・運営を行うなど、主体的に資質・能力の向上に取り組むことができる柔軟な研修等の機会を設定すること。
Ｂ　教職員に必要な資質・能力の育成には児童生徒や地域との関わり合いの中で育成されるものも多いことから、児童生徒の教育相談や学校外の方々と教職員が協働的に取り組む活動を設定すること。
Ｃ　教職員の資質・能力の向上を効果的・効率的に図るために、個人目標の設定や取組内容の決定を行う際に、福岡県教員育成指標を活用すること。</td><td>ジブン学：T(Teacher)「ジブン育成タイム」　（視点 C に該当）
教師が自身の課題（教科等指導や学級経営、保護者対応等）を自覚し、その課題に応じて職員間でグループを作り、課題に応じて学習やスキルトレーニング、オンデマンド研修等を選択し、各自の課題解決を目指す。</td></tr>
<tr><td>ジブン学：T(Teacher)「ジブン深掘りタイム」　（視点 A,C に該当）
教師自身が「わくわく」したり「じっくり」取り組んだりすることが必要な時間を確保し、単元計画や授業内容等を考え、実践する。</td></tr>
<tr><td>研究内容Ⅱ</td><td>教育課程内で行う授業の在り方を究明する。短縮された小学校 40 分、中学校 45 分の授業における指導や支援の在り方を、授業実践により検討する。具体的には、以下の４点を具体的な検討内容とする。
○　教科等における内容を効果的・効率的に学ぶカリキュラム・マネジメント及び教科等横断的なカリキュラムのデザイン
○　授業時間短縮に応じた指導過程の最適化
○　知識及び技能の習得や習熟、思考力、判断力、表現力等を育成するための、効果的・効率的な支援や指導の手だての創出
○　児童生徒の学びを一定のまとまりとして捉えて行う学習評価の内容や方法の整理と適正化</td><td>校内主題研究の検討及びカリキュラム・マネジメント

【校内研究主題】
「主体的に学ぶ生徒を育む学習指導法の研究
～各教科における「真正の課題」を取り入れた単元構成の工夫を通して～」

【授業づくり講座】
基本的な指導技術（めあての作り方、板書と ICT の使い分けなど）を学ぶ学習会を通して、教師の授業力を向上させていく。</td></tr>
</table>

糸島市立志摩中学校

１　目的

○　研究内容Ⅰ（生徒）の指針１（児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動の設定）に基づき、糸島や志摩地区の産業や人材を活用した探究的企業体験活動や大学と連携した探究的研究者体験活動を通し、生徒のチャレンジ精神や探究心等に加え、判断力や実行力、コミュニケーション力等の資質・能力の育成に資する。　（**ジブン学：S(Student)「ジブン深掘りタイム」**）

２　内容

（１）実施期間　　令和８年４月～10 月　　※　計 13 回

（２）活動の実際

４月末に全体でオリエンテーションを開いて探究の６つのジャンル（**資料１**）について説明した。その後、生徒はアンケートで自分の興味・関心に近いジャンルを選択した。今年度については３年生全員を第１希望とし、来年度も実施が予想される１、２年生は、一部、第２希望に回し、最終的に各コースの人数に偏りが出ないように調整した。

① くらしの不思議
② 自然と科学の不思議
③ スポーツ・運動の不思議
④ 世の中の不思議
⑤ アートの不思議
⑥ ストーリーの不思議

【資料１】提示した６つのジャンル

最初の３回はテーマ決めに時間を費やした。テーマの交流会も行った。テーマが明確になった生徒から各自の具体的な探究活動を行った。テーマが近い生徒同士は、相談の上、グループを組むことも可能とした。なかなかテーマを決められない生徒については、「探究カウンセリング担当」の先生に相談にのってもらう仕組みをつくった。学習を進めていく中で、探究活動の経験が少なく、「深掘り」する視点がうまくもてずに、テーマが漠然としている生徒が一定数いた。そこで、一人の教員が担当する生徒を 15 名程に限定し（グループ制）、その教員がチューターとして、生徒一人一人の進捗状況の把握やアドバイス等を積極的に行うようにした。

第７回目が終わったところで夏季休業に入った。９月から再開し、発表会に向けての活動を中心としながら進めた。夏季休業期間中に、九州大学に学生サポーター（**資料２**）の募集を行った。そこでは、５日間の日程で、13 名の九州大学の学生・院生の参加があり、生徒の探究活動へのアドバイス等をしてもらった。また、発表会に向けて、発表の形式や例を示して、①プレゼン型　②実演型 ③展示型の３つの型（**資料３**）のいずれかで、生徒全員がグループ内で発表を行った。



【資料２】九州大学の学生サポーターが支援する様子

①　プレゼン型	②　実演型	③　展示型
１　研究背景と目的	１　研究背景と目的	１　作品制作の理由
２　準備・方法	２　準備・方法	２　製作時間
３　結果	３　結果	３　鑑賞者へのメッセージ
４　考察	４　考察	（見てもらいたい点など）
５　今後の展望	５　体験	
６　参考文献	６　今後の展望	
	７　参考文献	

【資料３】探究活動のまとめ方として生徒に提示した発表の形式

また、グループ内での発表終了後は、10月末の２日間のSmile Time（40分）を活用して、全体発表会および全体展示会を行った。全体発表会については、各グループの担当教員が選出した生徒を中心に、４組の生徒が探究成果について、全校生徒の前で発表を行った（**資料４**）。全体展示会については、③展示型を選択した生徒全員の作品を、多目的ホールに展示し、全校生徒が鑑賞できるようにした。

	ジャンル	発表生徒	テーマ
①	アート	３年生３名	洋楽ロックを極める！　【実演型】
②	自然と科学	１年生	ミズクラゲの生活環　【発表型】
③		３年生	スパイダーマンのウェブシューターは実際に作れるのか！？【実演型】
④	世の中	２年生	なぜSNSには中毒性があるのか【発表型】

【資料４】ジブン深掘りタイム全体発表会にて発表したテーマ一覧

３　成果と課題

○　生徒が毎回、楽しそうに生き生きと取り組む様子が見えた。他学年とグループを組んだ生徒もいて、同学年だけでなく、学年を超えた交流も生まれた。

○　自分がわくわくする（関心をもっている）ことを、形にしていく喜びや充実感をもつと同時に、その難しさを体感したことで、今後の活動に生かされる教訓を得た生徒が多かった。

●　教師としては、多様な探究活動を想定していたが、十分な時間が確保できず、生徒が探究活動の幅を広げられなかったように見受けられた。また、探究活動の方法が、タブレット端末に偏り過ぎており、単に調べ学習に終始している様子も見受けられた。

●　主体性を十分に発揮できていない生徒が見受けられた。分野ごとのグループを組んだが、おしゃべりやネットサーフィンに終始したり、人任せになったりしている生徒も一部見受けられた。

４　今後の方向性

・１回40分×13回（発表を含む）だったが、もう少し回数を増やしたり、時には２回分まとめて時間を確保したりするなどして、生徒が自身のテーマを深く見つめ直したり、じっくり取り組んだりできる時間の設定が必要である。

・質の高い探究成果をあげた生徒（グループ）を表彰するなど、全校でお互いの探究成果を共有・評価し、自分の学びに誇りを感じることができる雰囲気や学校文化をつくっていきたい。

・生徒の興味・関心に基づく自己選択・自己決定を一層尊重するとともに、テーマ設定や探究活動の進め方に困難さを抱える生徒に対して、チューターによる個別の助言や探究カウンセリング等の支援を充実させる。あわせて、生徒の主体性を引き出す教師の伴奏型支援の在り方について検証していく。

糸島市立志摩中学校

１　目的

○　研究内容Ⅰ（生徒）の指針１（児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動の設定）に基づき、生徒が自身の課題（教科等や人間的側面、スキル等）を自覚しその課題に応じて、設定された講座やスキルトレーニングを選択し、各自の課題解決に必要な資質・能力の育成に資する。　（**ジブン学：S(Student)「ジブン育成タイム」**）

２　内容

（１）実施期間　　令和８年１月 13 日（火）、20 日（火）、29 日（木）　　※　各日 40 分×３日間

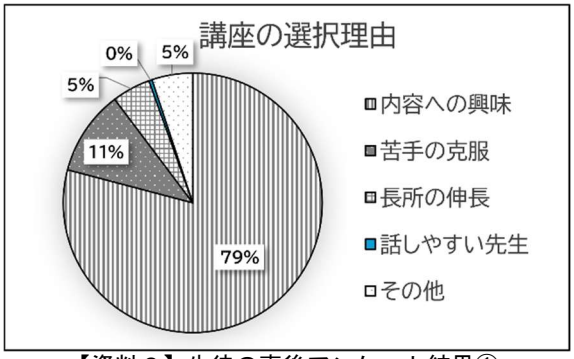
（２）活動の実際

わくわく講座は、生徒が自分の課題（教科等や人間的側面、スキル等）や、自分の得意な分野をさらに伸ばすために、教師によって開設された講座一覧（**資料１**）の中から自分で選択して受講し、自分のスキルアップにつなげることをねらいとして行った。また、わくわく講座は教職員全員（栄養教諭・養護教諭を含む。）が一人一講座を開設した。教師側が設定した講座の内容としては、各教科等の基礎的な学習内容を復習できる講座から、その教科等において発展的な内容に取り組めるものを開設し、全３回の講座とした。その際、内容等の重複がないように、教科部会を開いて内容の検討を行った。事前に生徒にアンケート集約アプリにて受講したい講座についての希望を調べた。生徒は講座一覧の中から、第１希望から第５希望までを選択した。

教科名	講座名	講座内容	活動場所	持参物
国語	「日本新薬こども文学賞」に挑戦!	絵本の原作となる「物語」を原稿用紙6枚以内で執筆し、応募します。 ※ 結果通知は来年5月以降。3年生は、入賞した場合、志摩中にて受け取り可能な人のみ受講可能。	ふれあい5	タブレット、筆記具
	本の虫	本を読んで、本の紹介をし合う。	図書館	筆記具
	百人一首をしよう	源平や散らし取りをします。	ふれあい7	資料集、筆記具
	料理のレシピを作ろう	本(物語)の中に登場する料理のレシピを作ってみよう。	図書館	料理本、タブレット
	作文を書こう	作文の書き方を行い、実際に書いてみます。	ふれあい1	筆記具
社会	裁判員裁判	裁判員裁判の目的、役割を学ぶ。	3年2組	筆記具
	株式学習ゲーム	模擬投資を行う。	ふれあい9	タブレット、筆記具
	歴史新聞編集部!	歴史について深く探ってみよう!新聞記事などにしてみよう!	1年4組	筆記具
	法律	いろいろな判例をみていこう!	ふれあい2	筆記具
	History Café	歴史について気楽に話しましょう。	1年1組	タブレット、筆記具
	社会問題の考察をしよう	ゲーム理論を用いた数学的、論理的考察をします。	1年3組	筆記具
数学	確率	確率について考えます。	ふれあい3	筆記具
	ナンプレにチャレンジ	ナンプレ(数独)を解きながら頭の体操をします。	3年4組	タブレット、筆記具
	数学検定5級に挑戦	数学検定5級(中学1年生程度)の数理技能問題(文章題)を解きます。	サポートルーム	筆記具
	数学の歴史	数学の偉人のエピソードをまとめ、共有します。	1年2組	タブレット、筆記具
理科	リカゲーム	理科に関する製作活動を行います。	武道場	筆記具、その他連絡
	中学理科の計算問題講座	中学2年生で学習する電気分野の計算を復習します。	3年1組	筆記具
	理科の実験・活動	①水中シャボン玉をつくり、そのつくりも考えます。 ②色が変わる焼きそばづくり ③原子モデルカードでバトル	理科室1	筆記具
	バランスゲームをしよう	重心について考えます。	理科室2	筆記具
	凧あげを科学しよう!!	凧あげを科学的に考え、作って、飛ばしてみます。	調理室とグラウンド	タブレット、筆記具
音楽	リズムに合わせて	リズムに合わせて体を動かす。	音楽室など	筆記具
美術	ポストカード制作	気持ちが伝わる手書きのポストカードを制作	美術室	タブレット、筆記具
保健体育	THE筋トレ	コーディネーショントレーニングや筋トレを行います。	武道場	体操服、体育館シューズ
	Enjoy Running!	楽しくランニングをしましょう。	グラウンド	体操服
	ケガをしにくい体のつくり方	ケガを防ぐための体つくりを考えましょう。	多目的ホール	体操服、体育館シューズ
	持久走	外周を走ります。本気の人のみ。	外周	体操服
技術	技術	技術に関連する各自の問題を解決する。 1:技術に関することで、やってみたいことをが明確な人 2:自分で計画し、実行・改善の繰り返しを実行できる人 3:問題解決に必要な費用は自己負担	技術室	各自が必要なもの
外国語	English Café	楽しい雰囲気でずっと英語でしゃべります。	PC教室	タブレット、筆記具
	Let's Sing an English Song!	フォニックスで正しい発音を学び、英語の歌を歌ってみよう。	ふれあい6	筆記具
	海外の文化に触れよう	洋画や洋楽などから日常で使われる英語フレーズを学びます。	3年3組	タブレット、筆記具
	英検にチャレンジ!	英検合格に必要な語彙・文法・英作文・リスニングの対策をします。	ふれあい4	筆記具
養護教諭	ストレスマネジメント	リラクゼーションなど、ストレスが軽くなることをやってみよう。	保健室	筆記具
栄養教諭	味覚を味わい、レシピを考えよう	五味や様々なだしを味わい、だしを使ったレシピを考えてみよう。	調理室	筆記具

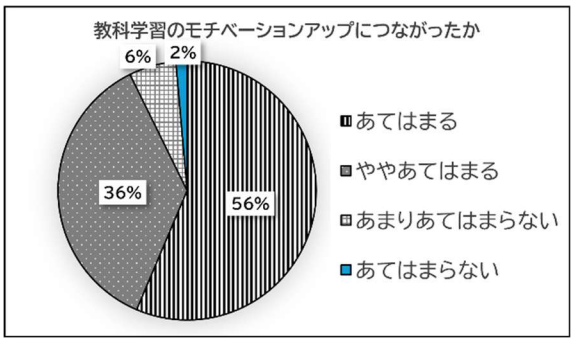
【資料１】令和７年度に開設したわくわく講座一覧

生徒は、自分で選択した講座だったため意欲的に取り組む様子が見られた。事後のアンケート結果（**資料２**）からも、生徒が自分の興味・関心に応じて講座を選択していたことが伺える。また、講座を選択した理由の中には、「一番現実的で役に立ちそうだったから」という記述もあった。しかし、苦手を克服することや自分の長所を伸ばすという視点をもって、選択している生徒は少なかった。教師側としても、教科等の学習により興味をもって



【資料２】生徒の事後アンケート結果①

もらうために、基礎的な内容から発展的な内容まで多様な講座を準備した。事後のアンケート結果（**資料３**）からは、受講後に生徒がその教科等の学習により興味をもったことがわかる。また、通常の教育課程での授業を受けることに苦手意識があったり、学習意欲が高くなかったりする生徒も、自分が選択した講座には途中からでも参加する様子も見られた。



【資料３】生徒の事後アンケート結果②

３　成果と課題

○　生徒が自分で選択した講座であり、教師も自分の得意を生かした講座だったため、生徒・教師ともに楽しく専門性の高い意義のある学びを共有でき、ウェルビーイングを向上させる一助となった。

○　日頃、教室で授業に参加することが困難な生徒が自分で選択したわくわく講座に参加する姿が見られた。このことから、生徒の興味・関心に応じて学習内容を選択できる環境を整えることが、多様な生徒の学びへの参加を促す可能性が示唆された。

●　教科の本質に触れることができる講座をさらに設定する必要がある。各教科で講座内容を再度検討し、研究内容Ⅱ（授業づくり）やジブン深掘りタイム（探究活動）につながるようにしていく必要がある。

●　生徒自身が課題意識や自分の強みを伸ばすという視点をもって、講座を選択できている生徒が少なかった。自分の課題や強みを把握するための取組が、講座を選択する前に必要だと考える。

４　今後の方向性

・令和８年度は年間２回（11 月、１月）実施するよう計画している。時期の設定理由としては、前期の学習成果を受けて自分の課題や強みを把握し、後期中間ごろで２回を計画的に選択できるようにする。

・講座の内容については、各教科において自分の課題を克服するための講座や、自分の強みを伸ばす講座をバランスよく設定するようにする。また、生徒がその教科等について、さらに学びを深めたいといった生徒の探究心を刺激するような講座内容を工夫する。

Smile Time 活動報告【放課後ジブンタイム】　令和８年 11 月 13 日（金）

糸島市立志摩中学校

１　目的

○　研究内容Ⅰ（生徒）の指針１（児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動の設定）に基づき、放課後個人の選択的活動の時間として設定し、好きなように時間を使う活動を通し、生徒が自身の学びを計画的に進めるために必要な資質・能力の育成に資する。

（**ジブン学：S(Student)「放課後ジブンタイム」**）

２　内容

（１）実施期間　　令和８年５月 19 日（火）、６月２日（火）、11 日（木）　計３回

（２）活動の実際

生徒が自らの興味・関心や課題意識に応じて過ごし方を決定する「個人の選択的活動の時間」として設定し、校内各所を開放して実施した。主な活動場所と生徒の様子は以下のとおりである。

ア　ランチルーム・各教室での様子

各テーブルに分かれ、自分で取り組む内容を決定し、学習に取り組む姿が見られた。取り組んでいた内容としては、学習プリントの要点整理やワークを活用した授業の復習、また生徒が教師に来てもらい、教科担任も参加した学習会などが挙げられる。また、学年や学級の枠を超えて集まり、互いに教え合ったり質問し合ったりして自発的に学習する場面も見られた（**資料１**）。



【資料１】ランチルーム、教室での学習に励む生徒の様子（R8　５月・６月）

イ　図書館での様子

昼休みにゆっくり本を読む時間が少ないため、静かな環境の中で、各自が興味のある書籍や専門書を黙々と読書する姿や、じっくりと調べ学習に向き合う姿が見られた（**資料２**）。



【資料２】図書室で読書・調べ学習に励む生徒の様子（R8　５月・６月）

ウ　体育館・グラウンドでの様子

身体を動かしたい生徒が集まり、バスケットボールやバドミントン、ランニングなどのスポーツを仲間と自主的に楽しむリフレッシュ・運動の場として活用していた（**資料３**）。





【資料３】体育館やグラウンドでスポーツをする生徒の様子（R8 ５月・６月）

３　成果と課題

○　生徒が自らの興味・関心や課題意識に応じて活動を選択し、学習や読書、運動等に主体的に取り組む中で、時間を自己調整・管理する計画性の素地が育まれた。

○　ランチルーム等を開放したことで、学年や学級の枠を超えた学習の教え合いや自然なコミュニケーションが生まれ、学校が安心できる居場所になるきっかけとなった。

●　生徒の活動場所（ひだまりホール、図書館、体育館、グラウンド等）が多岐にわたり、教員の見守り体制及び生徒の動向把握に困難さが生じた。

●　体育館やグラウンド利用において部活動の練習との境界線が曖昧になる場面が見られ、また自由度の高さゆえに目的を見いだせず過ごし方に戸惑う生徒への支援体制に課題が残った。

４　今後の方向性

・自主的な学習や中庭でのおしゃべり、帰宅後習い事に行くなど多様な選択肢があることを生徒にあらためて周知し、校内に残る生徒と下校する生徒の状況を事前に把握する。
・「放課後ジブンタイム」を独立した時間として終わらせず、「ジブン深掘りタイム」で設定した個人の探究の続きに取り組む時間にしたり、「オトナとお話 Week&Day」のように先生への質問や進路相談に行く機会として活用したりするなど、生徒自身が目的に応じて他の取組や授業と連動させて使えるように時間設定を見直したり、この活動に応じた支援を行ったりする。

Smile Time 活動報告【One School プロジェクト】　令和８年 11 月 13 日（金）

糸島市立志摩中学校

１　目的

○　研究内容Ⅰ（生徒）の指針１（児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動の設定）に基づき、５月に行われる体育祭のブロックでの人間関係で行う学校行事やレクリエーション大会等の企画を通し、生徒の計画性やチャレンジ精神の育成に加え、人間関係の醸成等の資質・能力の育成に資する。　（**ジブン学：S(Student)「One School プロジェクト」**）

２　内容

（１）実施期間　　令和７年 11 月 21 日（金）、　令和８年２月 24 日（火）　　※　計２回

（２）活動の実際

生徒が企画・運営するイベントは、学年を超えて生徒同士が安心して楽しみながら関わる機会をつくり、交流を通して友人関係の構築を促進したり、１年生に志摩中を「楽しい」と思ってもらったりすることをねらいとして行った。対象者は志摩中学校に在籍する生徒とし、生徒の主体性を重んじるために強制せず、自由参加制とした。

具体的なイベント内容としては、１回目は武道場と多目的ホールにて「人間ボウリング」「ボッチャ」「モルック」を行った。「人間ボウリング」では、生徒をピンに見立ててバランスボールを当てるというルールを実行委員が考案した（**資料１**）。また、２回目は校舎の様々な場所に設置されたミッションをクリアすることで星のポイントを集め、グループで競い合うルールの「志摩中ミッション・インポッシブル」を実行委員が考案し開催した（**資料２**）。

開催するにあたって、有志の実行委員は自分たちで一から企画書を作成した。何度も企画書を練り直し、糸島市役所に自ら連絡を取り、モルックなどの道具を借りに行くなど、多岐にわたる準備を自分たちで計画的に行った。「志摩中ミッション・インポッシブル」では６か所のミッションを考案した。中には、実行委員の特技を生かしその場でギター演奏をするイントロクイズや、一体感を楽しむためにくじで引いた単語から連想するポーズをグループでそろえるミッションなどがあった。



【資料１】生徒が企画・運営したイベントの活動の様子（R７ 11 月実施）

企画・運営に当たった有志の実行委員の中には生徒会役員の生徒も数名いたため、これまでの運営経験を存分に活かして組織を動かしていた。また当日の運営に際しては、２年生が３年生の動く姿を間近で見ることで、そのノウハウや動き方を自然と学ぶことができた。さらに、１回目（11 月）の運営する生徒（３年生）を見て、２回目（２月）はやってみたいと思って立候補した２年生が多々見られた。この縦のつながりによる教育効果は大きく、２年生が３年生に進級するにあたり「今度は自分たちが中心となって、また運営をやりたい」という生徒が現れるなど、次代のリーダー層が確実に育っている様子が見られた。



【資料２】志摩中ミッション・インポッシブルの活動の様子（R８　２月実施）

３　成果と課題

○　生徒主体の企画・運営と自由参加という形式により、多くの生徒が「楽しむ」という共通目的のもとに集まり、学年やクラスの枠を超えて安心して関わり合える場となった。特に１年生にとっては、上級生の温かい企画や生き生きと運営する姿に触れる機会となり、志摩中学校に対する「楽しい場所」という安心感や帰属意識を醸成する一助となった。

○　３年生の意欲的な運営を２年生が間近で見たことで、次年度の運営に対する高い意欲が引き出された。一過性のイベントに留まることなく、生徒の間で主体性やリーダーシップが次世代へと引き継がれる、持続可能な取組となっている。

●　自由参加制のよさがある反面、参加を見送った生徒や、こうした集団活動に抵抗がある生徒への配慮やアプローチについては、周知方法や企画のバリエーションを含めてさらに精査する必要がある。

●　新学期や学期末などの多忙な時期と重なるため、生徒が主体となって企画・準備を進めるための十分な時間的余裕の確保や、教員側の効果的なサポート体制の構築が必要である。

４　今後の方向性

・　意欲を示している現２年生を中心に新組織を早期結成し、培ったノウハウを引き継ぐ。さらに、より多くの生徒が参加できるよう、生徒実行委員会とともに企画の多様化や実施場所の工夫を重ねて活動の質を高め、志摩中の新たな伝統として定着させていく。

・　３年生の総合的な学習の時間（起業家教育）が本格化する５月以降は、各種行事や学習の重複により生徒・教員ともに準備時間の確保が難しくなる。そのため、十分な期間を確保し落ち着いて取り組めるよう、昨年度同様の 11 月・２月実施を基本として年間計画に位置付ける。

Smile Time 活動報告【オトナとお話 Week&Day】　令和８年 11 月 13 日（金）

糸島市立志摩中学校

１　目的

○　研究内容Ⅰ（生徒）の指針１（児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動の設定）に基づき、担任に限らず、本人が話を聞いてほしい教職員を選んだり、学校外から話をしてみたい人を自ら探し出したりして、自分の人生について考える契機とするとともに、キャリア発達に必要な資質・能力の育成に資する。　（ジブン学：S(Student)「オトナとお話 Week&Day」）

２　内容

（１）実施期間

オトナとお話 Week　令和７年 11 月 17 日（月）～11 月 21 日（金）

オトナとお話 Day　令和８年６月２日(火)、６月 11 日(木)、６月 23 日(火)

（２）活動の実際

昨年度実施したオトナとお話 Week では、生徒が話したいと思った教員が生徒一人一人の学校生活全般（学習・進路・友人関係・家庭・心身の健康など）について、放課後に面談を行い、生徒についての現状の理解と今後の支援方針を担任と共有した。

今年度実施したオトナとお話 Day では、生徒が話したい相手が校内の教員であった場合には、生徒がアポイントメントをとり、相談を行った。話したい相手が学校外であった場合には、アポイントメントをとるための文書作成を行った。初日のオリエンテーション**【資料１】**では、話してみたい相手はいないか、そのためにどんな準備が必要かについて担当教員から説明を行った。２日目、３日目はアポイントメントをとるためにどのような文章を送るか、どこに送ればよいのかについて調べ学習を行った**【資料２】**。



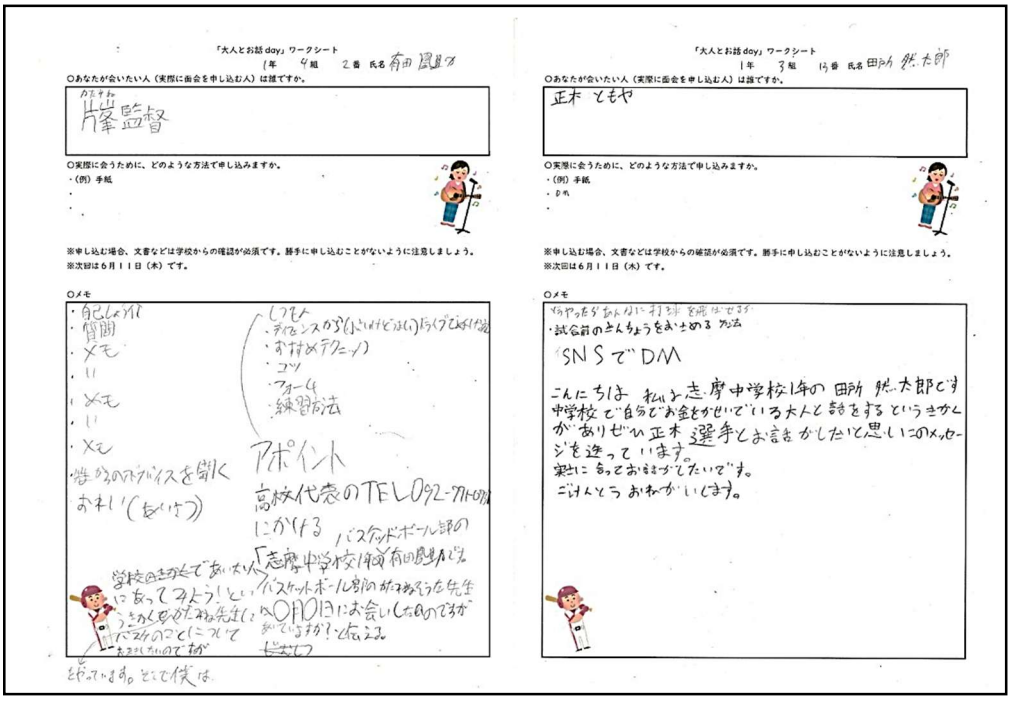


【資料１】 オトナとお話 Day オリエンテーションの様子





【資料２】 オトナとお話 Day 調べ学習の様子



【資料３】 オトナとお話 Day 生徒が記入したワークシート ２名分

【資料３】の左は本校バスケットボール部に所属する生徒で、福岡大学附属大濠高等学校バスケットボール部の監督を、そして右は本校軟式野球部に所属する生徒であり、福岡ソフトバンクホークス所属の選手を話したい相手として選択した。２名とも、自身が行っているスポーツについてアドバイスをもらうためにこの企画に参加した。

３　成果と課題

○　例年行っている教育相談とは異なり、生徒が話を聞いてほしい教員を選択することができたため、学習・進路・友人関係・家庭・心身の健康などを生徒にとって相談しやすい環境を整えることができた。

○　生徒が希望する教員と面談を行うことで生徒についての現状の理解を深めることができた。また今後の支援方針を教員間で共有することで、適切な支援の方針を検討することができた。

●　オトナとお話 Week を実施している週に出張や、休暇などで生徒との相談時間が短くなってしまった場合があった。

●　オンラインでの面談も検討したが、学校外の実際に話したい相手と話すことができなかった。

４　今後の方向性

・　取組を実施する期間を広く設定しておき、生徒が相談した際に十分話すことができるように時間を設定していく。

・　生徒が学校外の相手と面談を希望した際には、有名人と話すことやファンレターを送ることが目的ではなく、自分の人生について考えるきっかけになるような相談相手や、相談内容であるかどうかを教員と対話しながら生徒自身が考えることができるように支援していく必要がある。

Smile Time（教師）活動報告【ジブン育成タイム】　令和８年 11 月 13 日（金）

糸島市立志摩中学校

１　目的

○　研究内容Ⅰ（教師）の指針２（自ら学び続ける教師を目指した教職員の資質・能力の向上を図る取組）に基づき、教師が自身の課題（教科等指導や学級経営、保護者対応等）を自覚し、その課題に応じて職員間でグループを作り、課題に応じて学習やスキルトレーニング、オンデマンド研修等を選択し、各自の課題解決に必要な資質・能力の育成に資する。

（**ジブン学：T(Teacher)「ジブン育成タイム」**）

２　内容

（１）実施期間　　令和７年 10 月～令和８年 10 月　　※　計　６　回

（２）活動の実際

ア　社会科授業づくり講座

（講師：福岡教育大学　藤島俊幸　先生／全２回：R7.10、 R8.2）

学習指導要領解説書に基づく授業の具現化や学習指導要領の読み方、概念的知識の獲得から逆算した「逆向き設計」による単元構造化について学んだ。

イ　マネープラン教室**【資料１】**　（講師：ジブラルタ生命　広瀬悌二　先生／R8.1.14）

生徒に金融教育ができるようになることや、教師自身の将来の生活設計を見据え、積立投資・税制優遇制度を活用した資産形成ができるような内容を学んだ。

ウ　外国語科特別部会**【資料２】**　（講師：九州大学　内田諭　先生／R8.1.28）

本校外国語科教諭の公開授業に対する指導助言および AI 評価システムの体験を通してスピーキング・ライティング指導を学び、生徒の「学びの主体的な調整力」を育む指導法を受講した。

エ　外国語科特別部会　（講師：春日北中学校　荒川大地　先生／R8.8.5）

「語用論」に基づいた段階的な「マルチモーダル・リスニング」（相手の意図や思いを捉え、自分の考えを再構築できる学習指導法）の実践を学び、生徒が主体的に表現し対話する授業改善の手だてを深めた。

オ　特別支援教育部特別部会

（講師：福岡教育大学　一木　薫　先生／全２回：R9 １月上旬および下旬の予定）

特別支援教育における自立活動について、実態把握の仕方や実態を踏まえた適切な支援や指導法について、具体例を交えて講話をもらう予定。参加対象は、特別支援学級担当の教員だけでなく、全教職員を対象に実施する予定。全教職員が参加することで、多様な個性や特性、背景を有する子供たちの包摂につながると考えている。



【資料１】マネープラン教室（R8 １月）



【資料２】外国語科特別部会（R8 １月）

３　成果と課題

○　福岡県教員育成指標と面談を連動させたことで、基本研修のないキャリアステージであっても自らの強みや課題に応じた目標設定ができ、目的意識をもって主体的に研修や授業研究に臨むことができた。

○　外国語科における生成 AI を活用した生徒の振り返り指導や、社会科の「練られた問い」と資料精査による単元構築など、実社会に生きる学力を育む具体的な授業改善につながった。

●　「Ａ計画」で立案した成長プランの進捗管理が個々の教員にまかせたままとなり、研修で得た知見や指導の手立てを、日々の年間指導計画や学習指導案へ組織的に落とし込んで継続的に検証する仕組みが不十分であった。

●　各教科で取り組んだ先進的な授業改善の成果や学びの履歴を、教科の枠を越えて職員全体へ共有し合う機会を十分に確保できなかった。

４　今後の方向性

・教科部会等で学習指導案や実践事例の共有機会を定期的に設け、研修成果を日々の教育課程へ確実に定着させていく。

・育成タイムで培った単元構想力や指導技術を、「ジブン深掘りタイム」における校外体験学習の教材化や生徒の探究活動へ直接連動させ、学校全体で生徒の主体的な学びへ還元する。

・『ジブン育成「Ａ計画」』を引き続き策定し、福岡県教員育成指標に基づいた自己の「強み・課題」を可視化し、その上で管理職との面談を連動させながら、各自のニーズに応じた校内・校外の研修を各自で実施していく。

Smile Time（教師）活動報告【ジブン深掘りタイム】　令和８年 11 月 13 日（金）

糸島市立志摩中学校

１　目的

○　研究内容Ⅰ（教師）の指針２（自ら学び続ける教師を目指した教職員の資質・能力の向上を図る取組）に基づき、教師自身が「わくわく」したり「じっくり」取り組んだりすることが必要な時間を確保し、単元計画や授業内容等の検討を通して、教師の力量向上に必要な資質・能力の育成に資する。　（**ジブン学：T(Teacher)「ジブン深掘りタイム」**）

２　内容

（１）実施期間　　令和７年 10 月～令和８年 10 月　　※　計　４　回

（２）活動の実際

教師と生徒がともに「わくわく」しながら学びや経験を深めることを目指し、校外の現場や地域の教育資源・地域行事を積極的に活用した実践的な活動に取り組んだ。

ア　地域史跡・平和学習「雷山空襲フィールドワーク」**【資料１】**

（教科問わず／R8.6.10）

地域の方によるガイドのもと、雷山空襲の際に使われた防空壕（おにくら）の内部や被災樹木などを実際に巡り、戦時下に地元・糸島で起きた「雷山空襲」の痕跡を歩きながら直接学ぶ活動を行った。地域の生きた歴史や戦争の記憶を現地で体感する貴重な機会となった。



【資料１】雷山空襲フィールドワーク

イ　福岡地方・高等裁判所見学会および司法体験**【資料２】**

（社会科教員中心・希望生徒／全３回：R8.3.25～26、R8.8.18）

生徒と教員がともに裁判所を訪問し、裁判所職員による説明を受けた後、実際の法廷における裁判傍聴や模擬裁判を体験した。法廷の厳粛な雰囲気を肌で感じ、公正な判断の大切さや主権者としての司法の役割について深く考える機会を創出することができた。



【資料２】裁判所見学および司法体験

ウ　糸島駅伝への参加（志摩中職員有志／R8.2.8）**【資料３】**

志摩中教職員チームを結成して地域の糸島駅伝に出場した。互いに声を掛け合いながらたすきをつなぎ、沿道からの温かい声援を受けながら完走を目指す中で、職員間のチームワークや地域とのつながりを体感する活動となった。



【資料３】職員で参加した糸島駅伝

３　成果と課題

○　地域の戦災遺構や裁判所といった本物の現場に足を運び、自ら体感したことで、教員自身の授業づくりの視野が深まるとともに、教科書を超えた問題意識や探究へのわくわく感を生徒と共有することができた。

○　糸島駅伝や地域のフィールドワークに教職員が主体的に参加したことで、職員間のチームワークや連帯感が深まり、地域の一員としてのつながりや協働意識を高めることができた。

●　校外活動や駅伝等で得られた成果や熱量を、参加した教員・生徒のみにとどめず、学校や学年全体の教育活動へ十分に波及・共有する仕組みが不十分であった。

●　地域の専門家や外部機関との連携が単発的な行事にとどまり、日々の指導の中に系統的・継続的に位置付ける体制づくりが不十分であった。

４　今後の方向性

・校外活動での体験や熱量を生徒へ還元できるよう、全校集会や授業の実施等、生徒に伝える機会の設定を検討する。

・地域の専門機関や地域行事との連携窓口を整理し、単発で終わらない継続的な協力体制を構築するとともに、教師と生徒がともにわくわくできる新たな校外活動テーマを開拓していく。

糸島市立志摩中学校

１　目的

○　校内主題研究の検討や、授業づくり講座での学習会を通して、５分短縮授業における指導や支援の在り方について、教職員の基礎的・基本的な指導力向上に必要な資質・能力の育成に資する。

２　内容

（１）実施期間　　令和７年９月　～　令和８年８月

（２）活動の実際

ア　主題研究構想の確認・共有化

志摩中学校の教育重点目標に掲げられた「生徒と教師がともに“わくわく”する学びの創出」に基づき、授業づくり部のメンバーで授業形態や授業方針について検討を行った。

また、昨年度の９月から主題研究構想の検討（**資料１**）を行ってきたが、本年度は生徒がこの教科を学んでよかった、さらに学びを深めていきたいと思えるような学習課題の設定、４５分授業に伴う学習内容の厳選と授業展開の工夫を大きな柱としてテーマを、「主体的に学ぶ生徒を育む学習指導法の研究　～各教科における『真正の課題』を取り入れた単元構成の工夫を通して～」とし、具体的な授業展開をいくつか考えた。その際、研究主任が主題研究の趣旨と具体的取組について説明し、授業づくり部メンバーが各教科の先生方に還元できるようにした。



【資料１】わくわく授業づくり部会議

イ　教科部会の定例化・特別部会の実施

研究発表会及び授業力向上に向け、各教科における教科部会を定例化し、月１回実施した。教科部会では、各教科における真正の課題とは何かを検討したり、公開授業の指導案についても検討したりした。現在、教科によっては外部講師を招聘し、各教科の特別部会として、生徒がわくわくする授業づくりや次期学習指導要領の方向性についての理解を深めている。実施した内容は以下のとおりである。

①　外国語科特別部会

○実施日　令和８年１月 28 日

テーマ　学習指導要領改訂の方向性とＡＩ活用について

講　師　九州大学大学院言語文化研究院・地球社会統合科学府・共創学部
准教授　内田諭先生

○実施日　令和８年８月５日（**資料２**）

テーマ　「相手の意図や思いを捉え、自分の考えを再構築できる学習指導法」
～語用論に基づいた段階的なマルチモーダル・リスニング～

講　師　春日市立春日北中学校教諭　荒川大地先生



【資料２】外国語科特別部会（R8 ８月）

② 社会科特別部会

実施日　令和８年２月 10 日（**資料３**）

テーマ　対話的で深い学びの実装

～次期学習指導要領を見据えて～

講　師　福岡教育大学准教授　藤島俊幸先生



【資料３】社会科特別部会（R8 ２月）

③ わくわく授業づくり部による授業づくり講座

実施日　令和８年７月 15 日（**資料４**）

テーマ　特別支援学級におけるめあての提示の仕方と板書の工夫

講　師　糸島市立志摩中学校特別支援教育課

教諭　畠中香、井上和香那



【資料４】授業づくり講座（R8 ７月）

ウ　前期の振り返りの共有

令和８年度第１回授業アンケート及び全国学力・学習状況調査から見える本校の現状と課題を校内研修会において共有した。今後の課題として、「教科の授業の内容は、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」という質問に対する否定的な回答が多く、その教科を学びたいと強く思う意欲や当事者意識につながっていない現状がわかった。後期に向け、実社会との結びつきや将来の有用性を実感できる実用的課題や、知的好奇心を刺激し、世界の仕組みに驚きや不思議を感じさせる学問的課題に基づく「真正の課題」を設定した授業改善を行うことを教員全体で共有した。その後、各教科でできることを共有し、生徒が主体的に“わくわく”しながら学びに向かうことができる手立てを話し合った。

３　成果と課題

○　教科部会を定例化することで、研究主題の内容を共有し、各教科の授業における具体的手立てを考える等、授業改善に向けた一助となっている。

○　生徒による授業アンケートや全国学力・学習状況調査の具体的な数値をもとに出てきた課題を、校内研修会において全職員で共有したことで、後期の授業に向けた具体的な改善策を各教科で検討することができた。

●　校内での授業づくり講座だけでなく、各教科で外部からの専門家を招聘し、次期学習指導要領の動向を踏まえた教科指導力を高める必要がある。

●　授業アンケート、全国学力・学習状況調査の分析をもとに、生徒が学びたいと思える「真正の課題」に基づく授業を実践する必要がある。

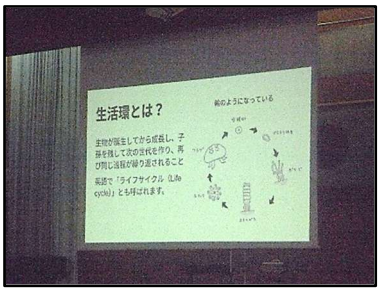
４　今後の方向性

・　授業力向上、次期学習指導要領に向けた国の方向性をより理解するための研修会を行う際に、各教科の指導主事を招聘し、授業観の転換ができるようにする。

・　生徒がその教科で学んだことが、将来、社会に出たときに役立つと思えるような学習課題を設定し、生徒と教師がともに“わくわく”する学びを創出していく。

本日、探究成果を発表する３名の生徒の探究の概要を紹介します。

発表生徒①：中学１年生
探究テーマ：ミズクラゲの生活環
探究の概要：



【資料１】ジブン深掘りタイム全体発表会での探究生徒①による発表

ミズクラゲの神秘的な姿に興味をもち、生活環を調べる中で、サンゴやイソギンチャクとは異なり、ポリプがストロビレーションを経てクラゲになる理由に疑問をもち、探究した。当初は、餌を探しやすくするためではないかと仮説を立てたが、ストロビレーションが起こる条件を調べる中で、クラゲになることには別の意義があると考えた。さらに、有性生殖による遺伝的多様性の確保と、移動能力の獲得による環境変化への対応という二つの観点から考察を深めた。最後に、クラゲの大量発生や海洋汚染にも目を向け、生物の生存戦略と海洋環境とのつながりについて考えた**【資料１】**。

探究生徒②：中学２年生
探究テーマ：SNS にはなぜ中毒性があるのか？
探究の概要：



【資料２】ジブン深掘りタイム全体発表会での探究生徒②による発表

自分自身が SNS を利用していることをきっかけに、SNS になぜ中毒性があるのかについて探究した。SNS には、友人とのコミュニケーションや情報収集、学習などの利点がある一方、中毒性には、やる気や快感、達成感などに関わる脳のドーパミンや、「認められたい」「孤立したくない」という社会的・心理的要因が関係していることを明らかにした。これらの仕組みを理解し、SNS の利点とリスクの両面から、日常生活における適切な利用の在り方について考察した。自分の利用習慣を見直し、よりよい付き合い方を考えることにつなげた**【資料２】**。

探究生徒③：中学３年生
探究テーマ：ウェブシューターは実現可能なのか
探究の概要：



【資料３】ジブン深掘りタイム全体発表会での探究生徒③による発表

友達と映画館で『スパイダーマン』を見たことをきっかけに、ウェブシューターの実現可能性に興味をもち、探究した。クモの糸の主成分であるタンパク質「スピドロイン」や、その強さとしなやかさの仕組みを調べるとともに、100 円ショップの商品を活用して実際に糸を飛ばし、蜘蛛の巣を作る検証にも取り組んだ。その過程で、人間を持ち上げられる装置を実現するには、強くしなやかな糸の生成や壁への固定など、多くの技術的課題があることに気付いた。調査と実験の両面から実用化の難しさを考察し、その可能性を探った**【資料３】**。

令和８～10 年度　糸島市立志摩中学校　主題研究の概要

１　研究主題

主体的に学ぶ生徒を育む学習指導法の研究
～各教科における「真正の課題」を取り入れた単元構成の工夫を通して～

２　研究前段（目黒区の先行研究と文部科学省研究指定校としての本校の立ち位置）

東京都目黒区では各授業時間を５分短縮することで「１日約30分の裁量的な時間」を創出し、生徒の探究的な活動や教員の資質向上に充てる教育課程の研究を積み重ねてきた。この研究は、教育課程の工夫で生み出す時間的・精神的な「余白」を土壌とし、教育の質をさらに高める段階にある。

こうした中で、本校及び校区内４校は、令和７年度から10年度までの４年間、文部科学省から「研究開発学校」の指定を受けた。研究開発課題については、「多様な個性や特性、背景を有する子供たちを包摂する柔軟な教育課程の編成」である。本校及び校区内４校では、この課題を糸島市の地域性や実態等に即して、研究内容を以下の２点に集約した。

研究内容Ⅰでは、目黒区が先駆けて取り組んできた教育課程の「柔軟かつ効果的な運用」をさらに深化・発展させること、研究内容Ⅱでは、授業時間の短縮によって創出された裁量的な時間を踏まえ、指導や支援の質をいかに担保すべきか、その具体的な在り方を追究・実証することとした。

本校は、先進モデル校として、「独自性」を追求しながらも、「再現性」や「汎用性」等の高い取組を全国へ発信していき、次期学習指導要領策定の一翼を担うことを目指している。

本校の主題研究は、研究内容Ⅱの追究・実証として位置づけている**【資料１】**。

研究内容Ⅱ 「各教科等の授業時間短縮に応じた授業におけるカリキュラム・マネジメントの在り方」	① 教科等における内容を効果的・効率的に学ぶ教科等横断的なカリキュラムのデザイン ② 授業時間短縮に応じた指導過程の最適化 ③ 知識及び技能の習得や習熟、思考力、判断力、表現力等を育成するための、効果的・効率的な支援や指導の手立ての創出 ④ 児童生徒の学びを一定のまとまりとして捉えて行う学習評価の内容や方法の整理と適正化

【資料１】研究開発課題における研究内容Ⅱ

裁量的な時間の創出は、授業時間の短縮を伴うため、限られた時間で最大限の効果を上げる授業の質的転換は避けて通れない課題である。本校では、社会からの要請に応える生徒育成の研究を前提にしながらも、研究内容Ⅱを追究・実証するべく、研究主題を「主体的に学ぶ生徒を育む学習指導法の研究～各教科における「真正の課題」を取り入れた単元構成の工夫を通して～」とした。

※　**【資料１】**①における教科等横断的なカリキュラムのデザインについては、主題研究２年目に教科部会、または拡大教科部会と連携し、推進していく。

３　主題設定の理由

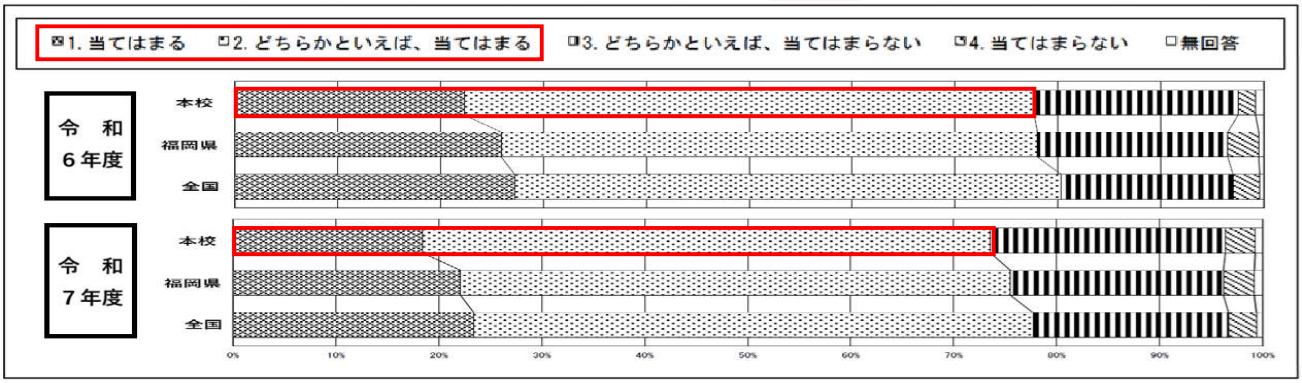
（１）社会の要請から

現代は未来予測が困難な「VUCA」の時代であり、生成AIをはじめとするデジタル技術の急速な進展により、社会構造は劇的に変容を遂げている。令和７年９月の文部科学省教育課程企画特別部会における「論点整理」では、画一的な能力以上に、独自の視点や発想の価値等が強調された。そこでは、従来の「正解主義」からの脱却を図り、民主的かつ公正な社会の基盤として学校を機能させる必要性が指摘されている。こうした背景の下、学校教育においては、豊かな人間性や学びに向かう力を育むとともに、思考力・判断力・表現力等を駆使して知識を概念として深く理解し、未知の状況でも活用可能な「生きて働く確かな知識」を習得させることが一層重要視されている。したがって、「主体的に学ぶ生徒」を育成し、真に「使える知識」の習得を可能にする学習指導法を究明することは極めて意義深いと考える。

（２）本校生徒の実態と課題

令和６、７年度の全国学力・学習状況調査の生徒質問紙から、本校３年生の学習に対する懸念点が顕著となった。まず、質問項目（32）「１、２年生の時に受けた授業では課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」に対して、肯定的な回答をした生徒は、全国平均を 3.4pt（県平均を 1.15pt）下回る結果となった。特に最も肯定的な「当てはまる」と回答した生徒の割合は、全国平均比で-4.95pt（県平均比で-3.65pt）と低い**【資料２】**。これらのデータから、全国や福岡県の傾向と比較し、本校生徒は、授業で学習課題の解決に主体的に取り組むことができていないという実態が明らかになった。

質問番号	質問事項										
（３２）	１、２年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか										
選択肢		1	2	3	4	無回答		1	2	3	4	無回答
本校	令和６年度	22.3	55.4	19.8	1.7	0.8	令和７年度	18.4	55.1	22.8	2.9	0.7
福岡県（公立）		25.9	52.1	18.5	3.0	0.5		22.1	53.4	20.7	3.0	0.8
全国（公立）		27.2	53.1	16.7	2.6	0.4		23.4	54.3	19.0	2.7	0.6



【資料２】令和６・７年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙（32）の結果

このような主体的な学習態度に対する認知の低さは、質問項目（37）「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり生かしたりすることができると思いますか」の回答結果に関連があると考える**【資料３】**。この項目に対して、肯定的に回答した生徒は全国平均を2.55pt（県平均を2.5pt）下回っており、特に、「当てはまる」と回答した生徒は、全国平均より5.65pt（県平均より5.6pt）も低いという顕著な格差が見られた。この結果は、授業での学びが『次の学習や実生活への活用』に結びついていない現状を示唆しており、授業が単なる『知識の暗記や正解を出すための処理』として認識され、学びの意義が実感できない状態では、「生きて働く確かな知識」の獲得には至らない。つまり、主体的に学ぶ態度の育成のためには、『何のために学ぶのか』という目的意識が欠かせないと考える。

さらに、自己調整学習（主体的な学び）の基盤となる振り返りについても問題が浮き彫りとなった。質問項目(36)「学習した内容について、わかった点やよくわからなかった点を見直して次の学習につなげることができていますか」に対して、肯定的に回答した生徒は全国平均を5.55pt（県平均を4.85pt）下回った。特に、「当てはまる」と回答した生徒の割合は全国平均比で-7.0pt（県平均比-6.65pt）と大きく下回る結果となった**【資料３】**。

したがって、「主体的に学ぶ生徒」を育成するには、生徒が社会との関わりや学ぶ意義を実感できる「真正の課題の設定」と、それを軸とした「学習活動の最適化」を、一連の流れとして構造化する「単元構成の工夫」が不可欠である。

	(37)	
	肯定的	当てはまる
本校平均	74.35	19.95
県平均比	-2.5pt	-5.6pt
全国平均比	-2.55pt	-5.65pt

	(36)	
	肯定的	当てはまる
本校平均	70.1	18.05
県平均比	-4.85pt	-6.65pt
全国平均比	-5.55pt	-7.0pt

【資料３】生徒質問紙(37)(36)の結果

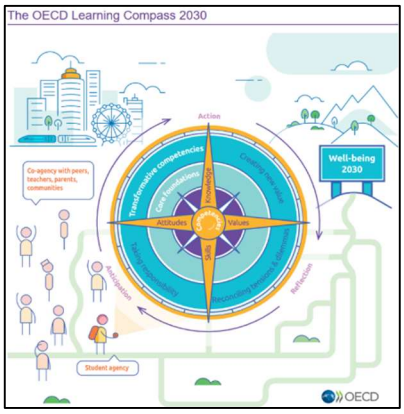
４　主題・副主題の意味

（１）主題の意味（「主体的に学ぶ」とは）

> 「真正の課題」の解決に向けて見通しをもち、「思考力・判断力・表現力等」を駆使して、必要な「知識及び技能」を習得・活用しながら粘り強く取り組み、その過程を振り返り、評価・改善し、次につなげていく姿のことである。

2016 年の中央教育審議会答申では、学習指導要領が掲げる３つの視点に基づいて、授業改善の中心を生徒とした上で「何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶか」が整理された。このうち、「どのように学ぶか」の核として提唱されたのが、「主体的・対話的で深い学び」である。同答申では、「主体的な学び」を「学ぶことに興味・関心を持ち、自己のキャリア形成と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び」と定義している。

また、OECD の「ラーニング・コンパス 2030」**【資料４】**においても、自律的に学び続けるためのプロセスとして AAR サイクル(Anticipation:見通し、Action:行動、Reflection:振り返り）が提唱された。この　　認知サイクルを回すことで、試行錯誤を繰り返しながら課題の解決に　向かい、主体的に学びを深めていくことが期待されている。



【資料４】OECD ラーニング・コンパス 2030

この国内外の潮流と本校生徒の実態に即し、生徒が「真正な課題」に出会う中で学習への動機づけや解決への見通しをもち、「思考力・判断力・表現力等」を駆使して、「知識及び技能」を習得・活用しながら、粘り強く取り組み、その過程を振り返り、評価・改善して、次につなげることができる生徒の育成を図る。

単元構成の各段階における生徒の姿

> ○　「真正の課題」を自分事（社会との関わりや学ぶ意義が実感できるもの）として捉え、解決への見通しを立て、学びに向かう姿。　（課題把握の段階）
>
> ○　各教科の「見方・考え方」を働かせ、「思考力・判断力・表現力等」を駆使しながら、必要な「知識及び技能」を習得・活用し、学習課題に対する自らの解を粘り強く追究する姿。　（課題追究の段階）
>
> ○　学習過程で得た解をまとめ、他場面（未知の状況）でも活用可能な「生きて働く知識」へ高めるとともに、自らの学習過程を評価し、今後の学習の改善につなげる姿。　（課題解決の段階）

（２）副主題の意味

ア　「真正の課題」とは

> 各教科の学習指導要領（目標や内容）に準拠したもので、社会との関わりや学ぶ意義を実感でき、生徒が鍛錬された探究を通して自ら知識を構築しながら、価値ある成果物を生み出すことができる学習課題のことである。

この定義の基盤となる「真正の学び」について、フレッド・M・ニューマン(2017)は、「単なる学校での成功を超え、成功を収めた大人たちが成し遂げるような、有意味で価値のある重要な知的成果を生成することこそが学習の本質である」と述べている。これらを実現するためには、「知識の構築」、「鍛錬された探究」、「学校外での価値」の三要素を備えた指導と評価課題が不可欠である。

また、石井(2025)によると、真正の学びにおける「真正（ホンモノ）」とは、単に実用的であることを指しているのではなく、教育的に加工される前の「現実のリアル」や「文化の厚み」に触れることであると指摘している。

次期学習指導要領に向けた「論点整理（※１）」においても、当事者意識を持って、自分の意見を形成し、対話と合意ができる生徒の育成が重視されている。各教科には「生きて働く確かな知識」の習得（知識の構築）に加え、興味・関心が広がる教材・学習方法の選択（学校外での価値）、表現活動や探究的な要素をもつ学習活動の充実、さらには家庭学習までを見通した自己調整の指導（鍛錬された探究）が求められている。

こうした動向等を踏まえた上で、石井(2025)は、生徒の主体性を育むためには、学習意欲を喚起する「入り口」の工夫が不可欠であると示している。具体的には、実社会との結びつきや将来の有用性を実感させる「社会的・実用的文脈」と、知的好奇心を刺激し、世界の仕組みに驚きや不思議を感じさせる「学問的・文化的文脈」という二つの側面から学習課題の設定をすることとしている。

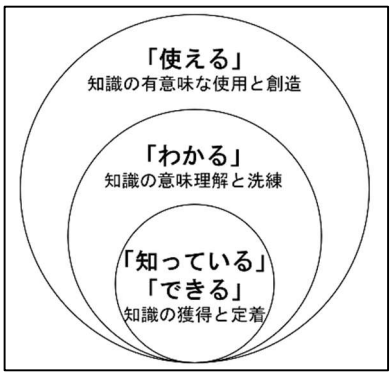
本校ではこれまでの研究実践を土台とし、これらを以下の２つの学習課題として定義する。

実用的課題：生徒が日常生活との繋がりを実感し、学ぶ必要性や切実感がもてる課題 具　体　例：日常生活や現実社会の中の課題に対して、「具体的な解決策を提案」できるもの 正解が一つではない問いに対し、根拠をもち「最適解・納得解」を導き出せるもの 習得する知識や技能が、実生活において高い「有用性」を感じさせるもの等 学問的課題：生徒の知的好奇心を刺激し、学習へのエネルギーを内発的に生み出す課題 具　体　例：経験的疑問や理想と現実のギャップから生じるもの、世の中の不思議や驚きを解き明かすもの（矛盾の解消、背後の法則、美の構造、真理の追究等）、多角的な解釈が可能なもの等

これらの学習課題の設定を通して、「生徒の目を現実、あるいは学問の世界へと開かせていく、ホンモノのにおいのする授業」を展開しながら、次のような学力を身に付けさせていく（※２）。

石井(2023)によれば、教科の学力は「個別的知識・技能（覚える）」から「統合的な理解（わかる）」、そして「総合的な活用（使える）」という三つのレベルで捉えることができると述べている。本研究では、最上位層の「使える」レベルの学力を目指す**【資料５】**。

従来の授業では「基礎を定着させてから応用へ」という順序が一般的であったが、石井(2023)は、基礎の反復のみに終始して土台（下位層）へと降りていく指導は、かえって主体性を損なう逆効果を招くと警鐘を鳴らしている。そこで本研究では、指導の順序を「逆転」させる。単元の導入で「真正の課題」を提示して生徒の学習への目的意識を　高め、その解決のプロセスにおいて「思考力・判断力・表現力等」を駆使させながら、必要な「知識及び技能」を習得・活用させていき、「高次の資質・能力」の獲得を目指す。（※３、４、５参照）



【資料５】学力の３層構造（石井、2023）

イ　「単元構成の工夫」とは

「真正の課題を軸とした単元の構造化」と「Less is More の考え方に基づく学習活動の最適化」により、限られた時間の中で「資質・能力の高度化」と「教育課程の効率化」を実現する、単元および授業デザインを構築することである。

①　「単元」という時間軸の必然性と配時の工夫

「真正の課題」は一単位時間で完結しない。石井（2025）が指摘するように、概念の習得には「問いと答えの間の長いプロセス」が不可欠である。そのため、一コマごとの分断された学習ではなく、単元全体で時間の活用を捉え直す。この時間軸の中で、知識習得を効率化し、探究に時間を厚く配分する「配時の工夫」こそが、授業デザイン転換の要となる。

② “Less is More”による質の高い学び

石井(2025)は“Less is More”の考え方に基づき、網羅的な教え込みから脱却し、「教える内容を絞り込むことで、学びを深め、結果としてより多くの力が身に付く」という指導内容や方法を精選することの必要性を指摘している。中核的概念に焦点を絞ることは、教育課程の効率化のみならず、高次の資質・能力の確実な育成につながる。その際、適切な「配時の工夫」を講じることで、生徒が粘り強く課題に向き合える探究の時間を確保し、学びの質の転換を図る。

③ 「問題解決学習」としての構造化

モデルの「再現性」「汎用性」を高めるため、問題解決学習のプロセスを単元スパンに適用する。「課題把握・課題追究・課題解決」を骨子として、各段階の特性に合わせて学習時間を最適に配分する。この構造化により、教師側の「指導の効率化」と、生徒側の「自律的な探究」を両立させる再現可能な仕組みを構築する。

５　研究計画の概要

（１）研究の目標

「主体的に学ぶ生徒」を育むために、各教科において実用的・学問的な側面をもつ『真正の課題』を軸とした単元の構造化を図るとともに、Less is More の考え方に基づく『学習活動の最適化』を推進することで限られた時間の中で「資質・能力の高度化」と「教育課程の効率化」を両立させる指導法の在り方について究明する。

（２）研究の仮説

単元構成における「課題把握」、「課題追究」、「課題解決」の各段階において以下の手立てを講じれば、生徒は「真正の課題（単元における学習課題）」解決への見通しをもち、「思考力・判断力・表現力等」を駆使して「知識及び技能」を習得しながら、粘り強く学びを調整することができる。また、その過程を振り返り、評価・改善し、次につなげていく「主体的に学ぶ生徒」を育むことができるであろう。

① 「課題把握」の段階では、まず「真正の（単元における学習）課題」設定の準備を行う。その際、社会との関わりや学ぶ意義を見いだすために必要な知識を習得させたり、各教科等の特質に応じた問題を意図的な工夫で生徒と出会わせたりする。次に、「真正の（単元における学習）課題」を設定する。最後に、生徒が見通しをもちながら学びを進められるようルーブリックを提示する（ルーブリックについては主に主題研究２年目以降実施）。それにより、学びへの動機づけと方向づけを行う。

② 「課題追究」の段階では、生徒が真正の（単元における学習）課題の解決に向かって、試行錯誤しながら粘り強く学びに向かえるよう「学習活動の最適化」を行う。１単位時間の目的を明確に描いた上で、その達成に不可欠な手立てとして、「配時の工夫」を軸とした指導を展開する。これにより、生徒が「思考力・判断力・表現力等」を発揮したり、課題解決に必要な「知識及び技能」を習得したり、学びを自己調整したりする等の学習活動の時間を設定する。

③ 「課題解決」の段階では、まず、学習のまとめ（単元における学習課題に対する解（有意味で価値（学校外での価値）のある知的成果の生成）を行う。その際、「課題把握」で提示したルーブリックを拠り所として、記述させる。次に、「学習（学び方を含む）の振り返り」を行う。その際、学習のプロセスを整理（わくわくした所や、つまずいた所、工夫した所等）し、次単元の学習を含む今後の学び方（次に試したい学び方、行動）につないでいく。

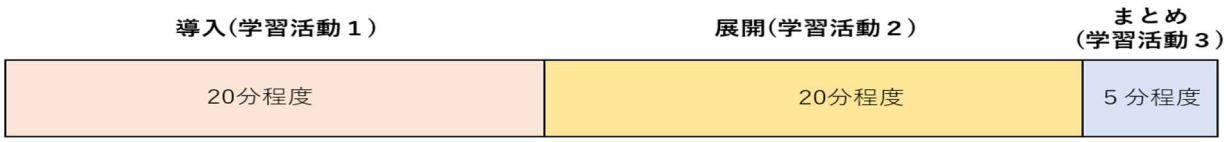
（１）研究の仮説における主な手立て

ア　志摩中授業スタイル（問題解決学習（Project-Based Learning）の学習過程に基づいた）

<table>
<tr><th>単元過程</th><th>段　階</th><th colspan="2">志摩中授業スタイルでの主な手立て</th></tr>
<tr><td rowspan="2">課題把握
（導　入）</td><td>動機づけ
（課題の把握）</td><td rowspan="2">（1）「真正の(単元における学習)課題」設定の準備を行う。
（社会との関わりや学ぶ意義を見出すために必要な知識を習得させたり、各教科等の特質に応じた「問題」を意図的な工夫で生徒と出会わせたりする）
（2）「真正の(単元における学習)課題」を設定する。
（3）生徒が見通しをもちながら学習を進められるように、単元での評価指標（ルーブリック）を明確化する(学習指導要領に基づく)。</td><td rowspan="4">45分授業における「学習活動の最適化」のための授業展開例(配時の工夫を行う)
【A】「導入特化型」
【B】「オーソドックス型」
【C】「90分１コマ型」
【D】「まとめ・次時導入接続型」
（主に内容知優勢の単元または時間）
【E】「単元内帯活動型」
（主に方法知優勢の単元または時間）
【F】「交流活動型」
【G】「思考中心（解の生成）型」
※ 各教科等の特質(実態)に応じて、ハイブリッド的に活用</td></tr>
<tr><td>方向づけ
（課題の設定）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">課題追究
（展　開）</td><td>情報収集
（学習活動）</td><td rowspan="2">生徒が「思考力、判断力、表現力等」を発揮したり、課題解決に必要な「知識及び技能」を習得したり、学びを自己調整（粘り強く取り組む）したりする等学習活動の時間を最適化する(効果的・効率的に資質・能力を高められるよう)。
※ 従来のような「網羅的な授業展開」を行うと、時間がオーバーするため、単元における学習課題を精選したり、学習内容を厳選したりするなど、カリキュラム・マネジメントが必須となる。</td></tr>
<tr><td>考察・構想
（思考の深化）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">課題解決
（終　末）</td><td>まとめ
（表現・整理）</td><td>単元全体の学習のまとめ(真正の(単元における学習)課題の解の表現)を行う。
その際には、「課題把握」の段階で提示した(3)を拠り所にして記述する。</td></tr>
<tr><td>振り返り
（ﾘﾌﾚｸｼｮﾝ）</td><td>次(単元)の学習や、今後の学び方の工夫へとつなげていくために、「学習(学び方を含む)の振り返り」を行う（5～10分程度）。
① 今回の単元での「わくわく」ポイント
② 自らの学びを分析（つまずいた所、工夫した所など）
③ 次の学びへの接続（次に試したい学び方、行動など）</td></tr>
</table>

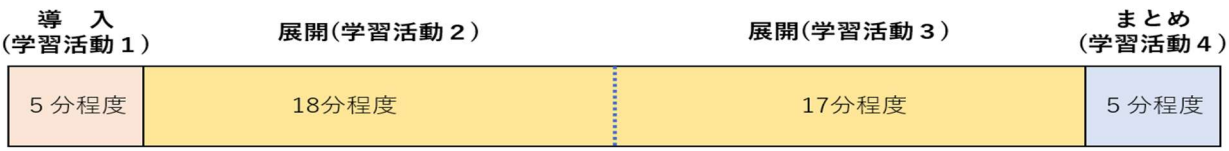
イ　45 分授業における「学習活動の最適化」のための授業展開例

【A】「導入特化型」



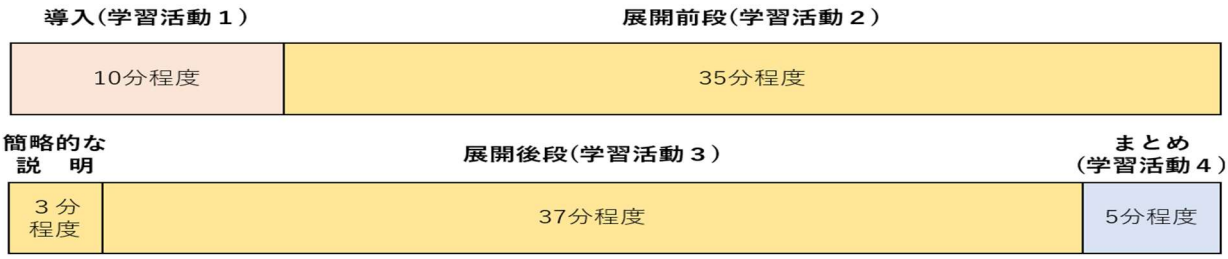
ねらい：単元または本時における『学習課題』の把握・設定に重点的な時間配分を行うことで学びへの動機づけや方向づけができる。（学びに向かう力、人間性等）

【B】「オーソドックス型」



ねらい：１コマ完結型で、従来どおり教師が多種多様なねらいをもった授業展開ができる。

【C】「90 分１コマ型」



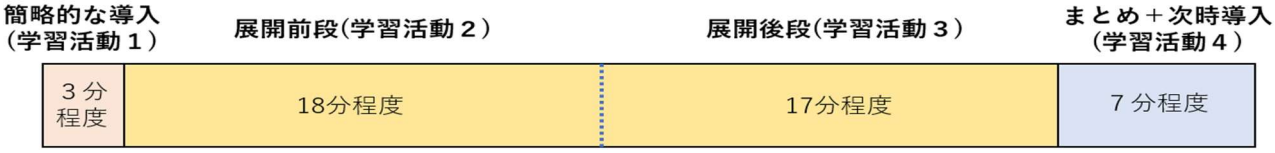
ねらい：生徒の資質・能力の育成に特化した時間の活用ができる。

（例）必要に応じて、基礎的な知識を習得することができる。（知識及び技能）

学習課題に対する自らの解を表現することができる。（思考力、判断力、表現力等）

粘り強く学習に取り組むことができる。（学びに向かう力、人間性等）

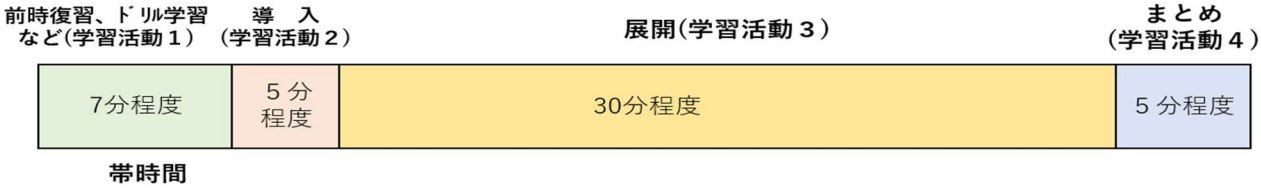
【D】「まとめ・次時導入接続型」（主に内容知優勢の単元または時間で活用）



ねらい：１単位時間の終末に「なぜ」や「どうして」と思う手立てを講じることで、次時の導入の簡略化や、家庭学習等での生徒の主体的な学びを促すことができる。

（学びに向かう力、人間性等）

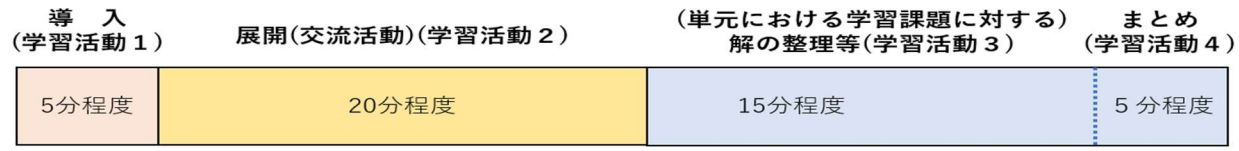
【E】「単元内帯活動型」（主に方法知優勢の単元または時間で活用）



ねらい：帯活動で基礎的な知識を習得することができる。（知識及び技能）

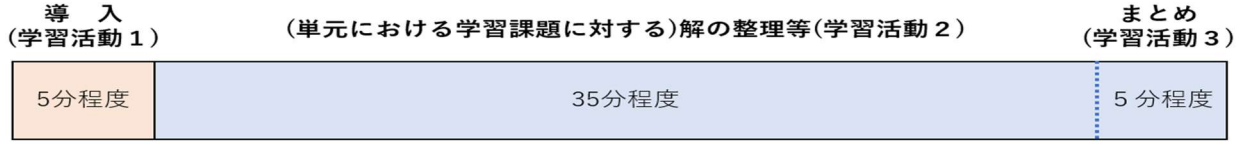
展開で習得した知識を活用することができる。（思考力、判断力、表現力等）

【F】「交流活動型」



ねらい：意図的な交流活動を通して、他者の視点ややり方等を、生徒が自らの解の整理やまとめ等に生かすことができる。（思考力・判断力・表現力等）

【G】「思考中心（解の生成）型」



ねらい：学習課題に対する自らの解を表現することができる。（思考力、判断力、表現力等）

粘り強く学習に取り組むことができる。（学びに向かう力、人間性等）

（4）検証方法

・全国学力・学習状況調査、県学力調査等の各種テストや質問紙の分析

・生徒による授業評価アンケートの結果分析　等

（5）計画

第1年次	ア　第１年次は、研究開発課題（文科省）の研究内容Ⅱにおける「③資質・能力の育成をするための効果的・効率的な指導や支援の手だての創出」の実現に主眼を置く。中核的な方策として、本研究の独自性である「真正の課題」の設定と、「学習活動の最適化（「配時の工夫」を軸とする）」を行い、「②授業時間短縮に応じた指導過程の最適化」で検証する。これにより、教育課程の効率化と、指導の質の高度化を両立させる具体的なモデル構築をする。（課題把握の段階、学習活動の最適化） イ　各教科部会（音楽、美術、技術・家庭科は１つの拡大教科部会とする）から、１本ずつ公開授業を行う（研究開発学校に伴う中間報告会にて）。その際の指導案については、必ず各教科の学習指導要領（解説）に準拠して作成するものとする。 ウ　指導案検討については、基本的に教科部会内で行うものとする（ただし、８月には他教科の先生方から）意見等をもらう場、９月には各教科で講師（指導主事等）を招聘し、指導・助言をもらう場を設定する)。また、公開授業に向けて、各教科グループ内で予備実践を実施し、指導法や学習活動について検討を重ねる。その成果と課題を中間報告会での公開授業へと還元し、実践の精度向上を図る。 エ　各学年で、各種テストや各種質問紙を分析し、「生徒の主体的な学びへの実感につながっているか」や「資質・能力の育成に寄与しているか」等を検証する。 オ　主題研究に係る全日程終了後、教科部会で研究の成果と課題のまとめを行い、次年度につなげる。
第2年次	ア　第１年次の研究の成果と課題を踏まえた上で、第１年次の“ア”を踏襲しつつ、「④生徒が学びを一定のまとまりとして捉えて行う学習評価の内容や方法の整理と適正化」の実現を目指す。具体的な方策としては、学習指導要領解説に準拠したルーブリックを用いた「まとめ活動」を行う。また、本研究における「自らの学習過程を評価し、今後の学習の改善につなげる姿」の実現に向けては、「学習（学び方を含む）の振り返り」を行い、振り返り活動の充実を見据えて、単元構成を練る。（課題解決の段階、単元構成の工夫） イ　基本的に、全教員が研究授業を行うものとする（内６本については、研究開発学校に伴う中間報告会での公開授業とする）。その際の指導案については、必ず各教科の学習指導要領（解説）に準拠して作成するものとする。 ウ　指導案検討については、基本的に教科部会内で行うものとする（ただし、８月には他教科の先生方から意見等をもらう場、９月には各教科で講師（指導主事等）を招聘し、指導・助言をもらう場を設定する)。また、公開授業に向けて、各教科グループ内で予備実践を実施し、指導法や学習活動について検討を重ねる。その成果と課題を中間報告会での公開授業へと還元し、実践の精度向上を図る。 エ　各学年で、各種テストや各種質問紙を分析し、「生徒の主体的な学びへの実感につながっているか」や「資質・能力の育成に寄与しているか」等を検証する。 オ　主題研究に係る全日程終了後、教科部会で研究の成果と課題のまとめを行い、次年度につなげる。

第３年次	ア　これまでの研究の成果と課題を踏まえた上で、第１、２年次を踏襲し、現時点での完成型を目指す。 イ　基本的に、全教員が研究授業を行うものとする（内６本については、研究開発学校に伴う中間報告会での公開授業とする）。その際の指導案については、必ず各教科の学習指導要領（解説）に準拠して作成するものとする。 ウ　指導案検討については、基本的に教科部会内で行うものとする（ただし、８月には他教科の先生方から意見等をもらう場、９月には各教科で講師（指導主事等）を招聘し、指導・助言をもらう場を設定する)。また、公開授業に向けて、各教科グループ内で予備実践を実施し、指導法や学習活動について検討を重ねる。その成果と課題を中間報告会での公開授業へと還元し、実践の精度向上を図る。 エ　各学年で、各種テストや各種質問紙を分析し、「生徒の主体的な学びへの実感につながっているか」や「資質・能力の育成に寄与しているか」等を検証する。 オ　主題研究に係る全日程終了後、教科部会で研究の成果と課題のまとめを行う。その後、研究部にて、その結果の集約を行い、次年度の研究主題の作成につなげる。

《主な参考文献》

・文部科学省『研究開発学校と学習指導要領』(2025)

・文部科学省『論点整理』(2025)

・文部科学省『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方針等について（答申)』(2016)

・文部科学省『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申)』(2021)

・安彦忠彦編著『OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030 仮訳』(2020)

・長崎耕作編著「「真正の学び／学力」論にもとづく真正の学習に求められる視点の検討」『研究紀要 58 巻』、島根大学学術情報リポジトリ（2025 年１月)、11-20 頁

・石井英真「次期学習指導要領を見据えた授業づくりの課題」『花まる先生と考える『未来の教育』プロジェクト「時間短縮でも学びの質を落とさない授業へ　～次期学習指導要領を見据えた教え方とは～」（オンライン)』、朝日新聞社（2025 年７月）

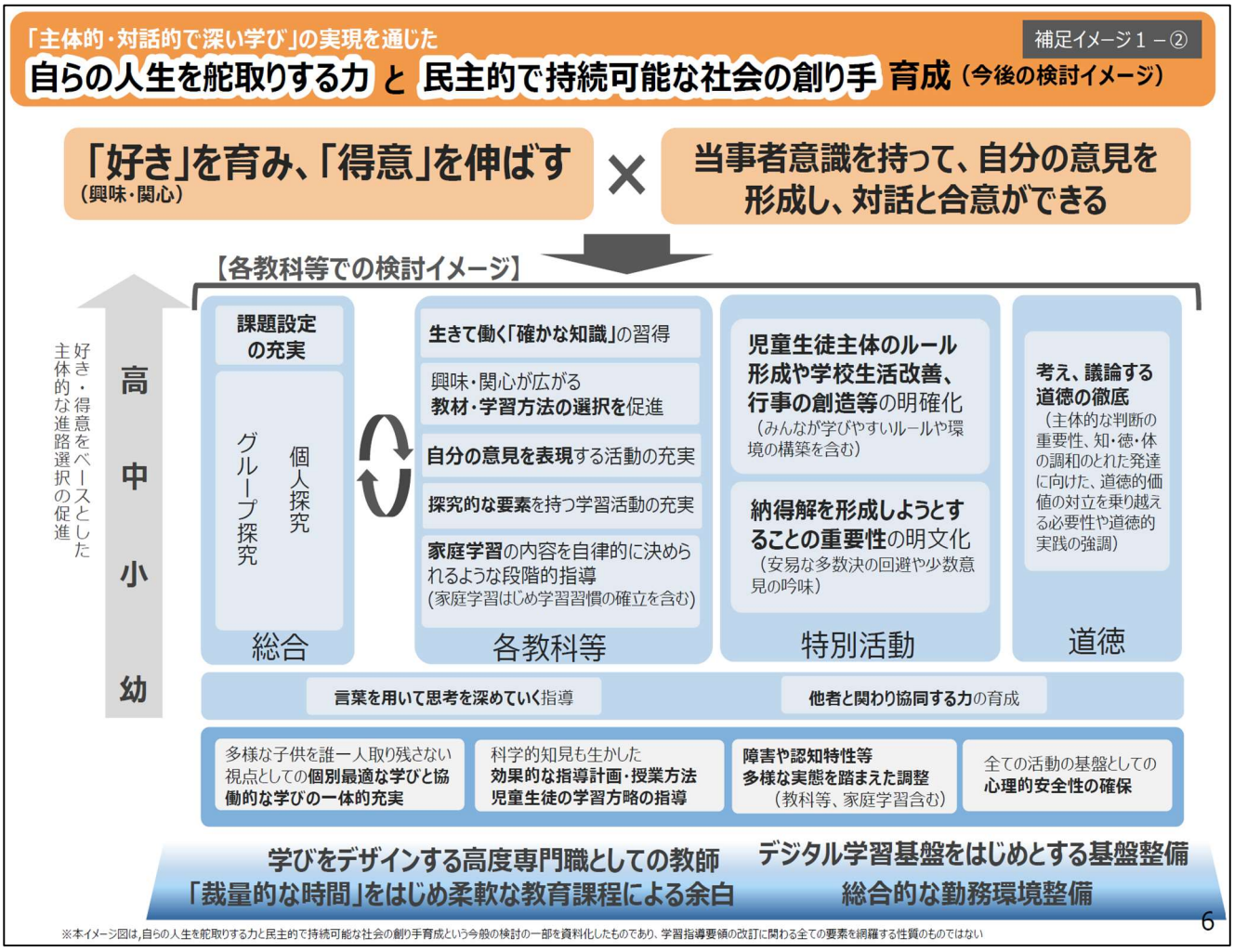
・石井英真『中学校・高等学校　授業が変わる学習評価深化論』図書文化（2023)

・西岡加名恵編著『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価　「見方・考え方」をどう育てるか』(2020)

・フレッド・M・ニューマン『真正の学び／学力―質の高い知をめぐる学校再建』春風社（2017)

＜参考資料＞

（※１）次期学習指導要領に向けた基本的な考え方（論点整理より一部抜粋）（令和７年９月）

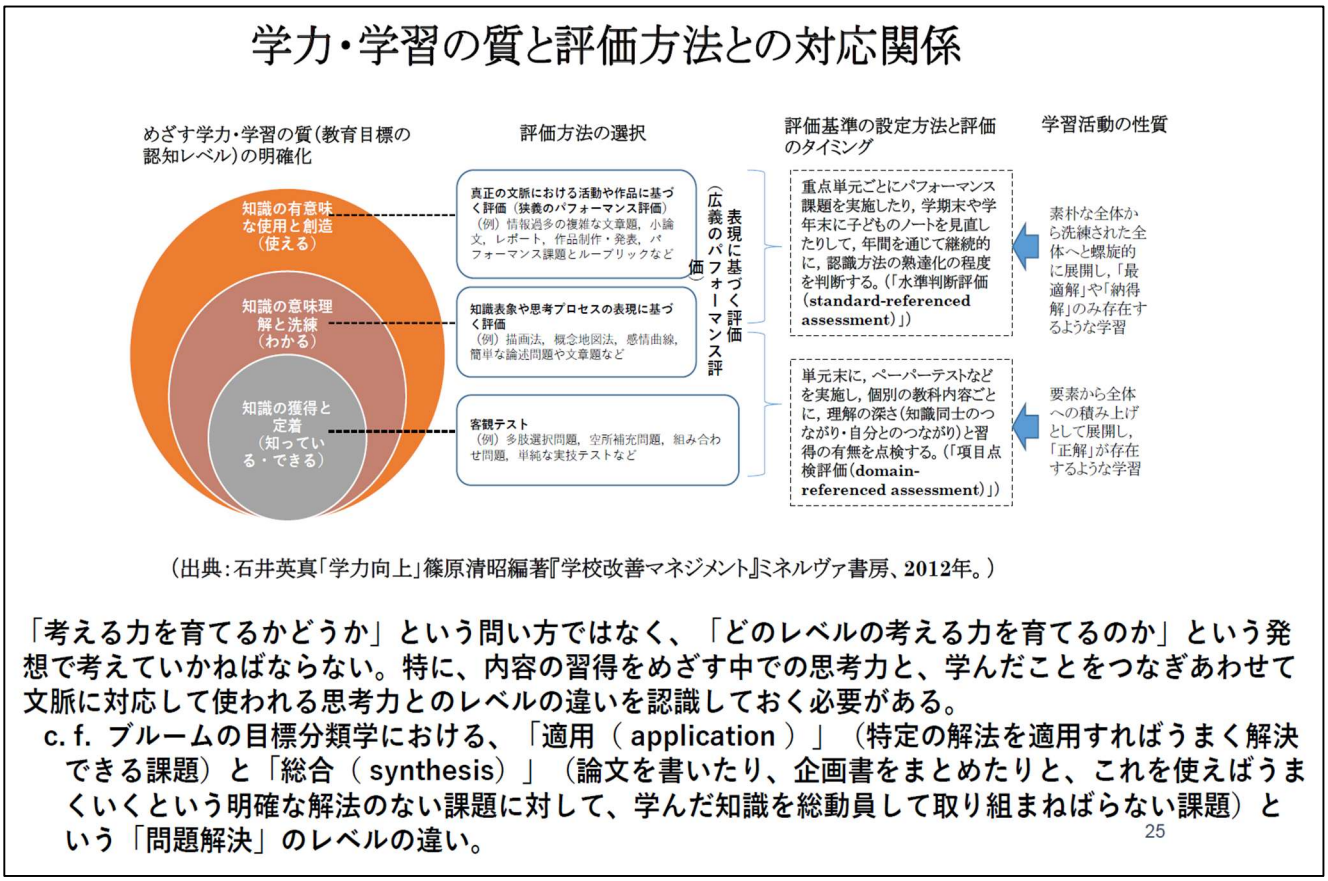


（※２）各教科の「真正の課題」パターン

	社会	理科	数学	英語	国語
社会的・実用的文脈	論争的な社会問題について、根拠をもって判断し、自らの主張や解決策を考える。 例：日清・日露戦争などを振り返り、なぜ戦争が起こったのか、避けられなかったのかを検討し、戦争を防ぐために大切なことを提案する。地元の過疎化対策を提言する。	日常的な自然事象を科学的に説明したり、科学技術が関係する実社会の課題について判断し解決策を考えたりする。 例：免疫のメカニズムをふまえて、エイズの特効薬について予想する。火事で破壊された森の植林計画について自然生態系への影響を判断する。	現実世界の事象や問題を数学化し、問題を解決したり変化を予測したりする。 例：文化祭でたこ焼き屋を出店するのに、過去のデータから一定の利益を上げつつ安い価格を設定する。データをもとにCO_2排出量を予想するモデルを考案し、地球温暖化を考える。	日常生活で直面しそうな場面で、相手意識をもって自分の言いたいことを英語で表現し伝え合う。 例：地元の商店街に配布すべく、地元の観光食べ歩きマップを使った英語での会話問答集を作成する。オンラインでつないで海外の姉妹校の生徒に日本のおすすめスポットを紹介する。	実用的テクストを読み解き作成したり、他者と論理的に意思疎通したり議論したりする。 例：読書を推進するための取り組みを全校生徒に提案するために、資料やデータを収集・参照したりしながら、自分の考えをまとめる。社会問題について討論する会を開く。
学問的・文化的文脈	事象や史料を批判的に読み解き、根拠を明らかにしながら解釈や結論を導き出す。 例：アニメの舞台のモデルがどの地域なのかを自然環境や人間描写などから推理する、異なる立場から書かれた史料を読み比べて、解釈の別れる歴史上の出来事の真相を探る。	問いや仮説を検証するために必要な実験手順を考えたり、事実から得られたことを考察したり、さらなる検証手順を考えたりする。 例：静止摩擦力について学んだあと、動摩擦力について調べる実験を計画・実施し結果を考察し、実験を練り直す。	数学的な問題や命題を論証し、筋道立てて説明し、統合的・発展的に問いを見出す。 例：三角形の面積を求める様々な公式の論証過程をわかりやすく説明・表現する。教科書の例題や適用題から数値や条件を変えて問題をつくり、算額風にその解答と解説を作成する。	英語で書かれた専門的なテクストを読み解き、パブリックな場面で論理的に議論を組み立て、コミュニケーションする。 例：教科書本文の内容と、それと異なる見解を記した英文を読み比べ、英語で各テクストの内容を要約しつつ、自分の意見を論理的にエッセイにまとめる。	学問的・古典的テクストについて、複数のテキストを読み比べたりしながら、解釈や主題への理解を深める。 例：教科書のテクストと関連するテクストを素材に、その主題に関して、論拠を挙げて意見文をまとめる。古文の一場面をグループで劇化する。

内容知優勢　　方法知優勢

（※３）学力・学習の質と評価方法との対応関係



（出典：石井英真「学力向上」篠原清昭編著『学校改善マネジメント』ミネルヴァ書房、2012年。）

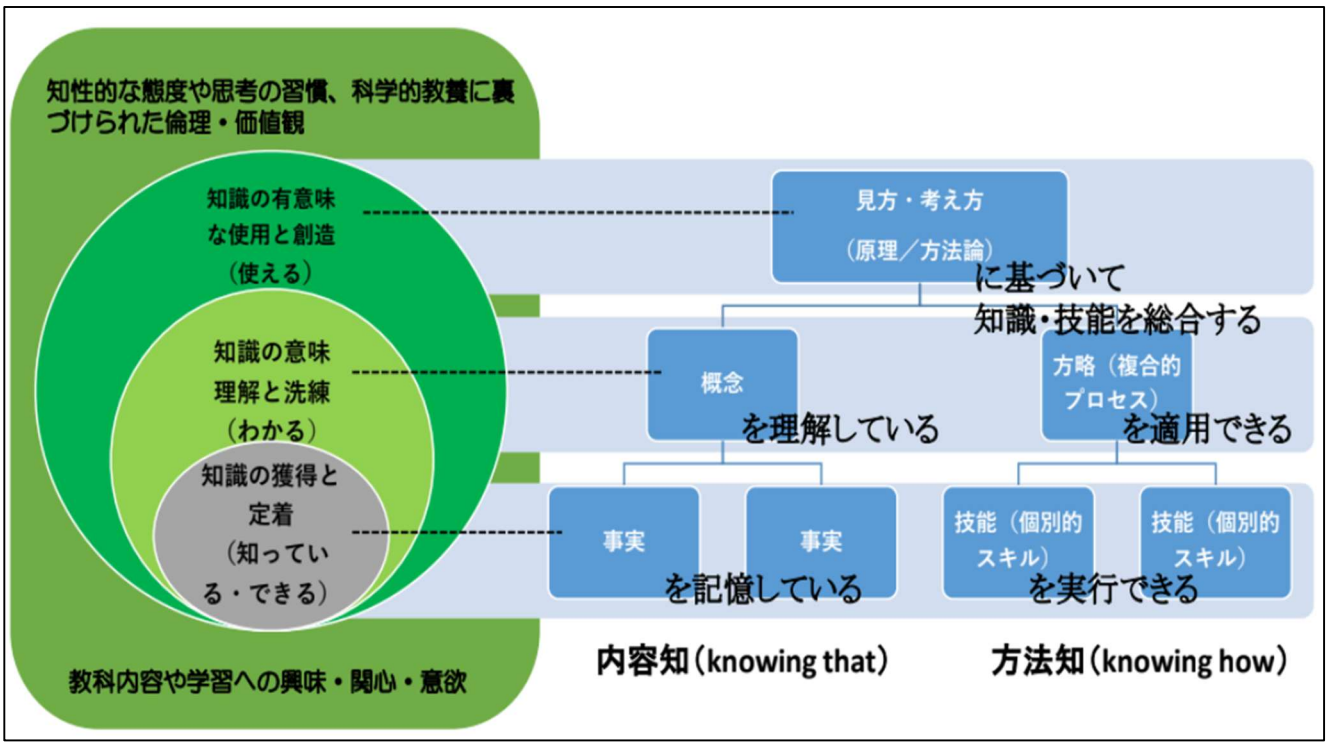
「考える力を育てるかどうか」という問い方ではなく、「どのレベルの考える力を育てるのか」という発想で考えていかねばならない。特に、内容の習得をめざす中での思考力と、学んだことをつなぎあわせて文脈に対応して使われる思考力とのレベルの違いを認識しておく必要がある。

c. f. ブルームの目標分類学における、「適用（application）」（特定の解法を適用すればうまく解決できる課題）と「総合（synthesis）」（論文を書いたり、企画書をまとめたりと、これを使えばうまくいくという明確な解法のない課題に対して、学んだ知識を総動員して取り組まねばらない課題）という「問題解決」のレベルの違い。

25

（※４）学力・学習の質的レベルと「知の構造」

（出典：石井英真『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房、2020 年）



（※５）学力・学習の質的レベルに対応した課題例、および適合的な教具とメディアの使用法

	教具とメディアの使用法	国語	社会	数学	理科	英語
「知っている・できる」レベル	問題集とドリルプリント AIによる個別最適化学習のためのタブレット	漢字を読み書きする。 文章中の指示語の指す内容を答える。	歴史上の人名や出来事を答える。 地形図を読み取る。	図形の名称を答える。 計算問題を解く。	酸素、二酸化炭素などの化学記号を答える。 計器の目盛りを読む。	単語を読み書きする。 文法事項を覚える。 定型的なやり取りをする。
「わかる」レベル	教科書、黒板とノート、ホワイトボードとワークシート 電子化された教材パッケージ、電子黒板、ノートやホワイトボードやワークシートとしてのタブレット	論説文の段落同士の関係や主題を読み取る。 物語文の登場人物の心情をテクストの記述から想像する。	扇状地に果樹園が多い理由を説明する。 もし立法、行政、司法の三権が分立していなければ、どのような問題が起こるか予想する。	平行四辺形、台形、ひし形などの相互関係を図示する。 三平方の定理の適用題を解き、その解き方を説明する。	燃えているろうそくを集気びんの中に入れると炎がどうなるか予想し、そこで起こっている変化を絵で説明する。	教科書の本文で書かれている内容を把握し訳す。 設定された場面で、定型的な表現などを使って簡単な会話をする。
「使える」レベル	史・資料、ホンモノの物や人や文献 情報収集・分析・表現やコミュニケーションのツールとしてのタブレット	特定の問題についての意見の異なる文章を読み比べ、それらをふまえながら自分の考えを論説文にまとめる。そして、それをグループで相互に検討し合う。	歴史上の出来事について、その経緯とさまざまな立場の声を紹介し、その意味を論評する歴史新聞を作成する。 ハンバーガー店の店長になったつもりで、駅前のどこに出店すべきかを考えて、企画書にまとめる。	ある年の年末ジャンボ宝くじの当せん金と、1千万本当たりの当せん本数をもとに、この宝くじの当せん金の期待値を求める。 教科書の問題の条件をいろいろと変えて発展的に問題をつくり、追究の過程と結果を数学新聞にまとめる。	クラスでバーベキューをするのに一斗缶をコンロにして火を起こそうとしているが、うまく燃え続けない。その理由を考えて、燃え続けるためにどうすればよいかを提案する。	まとまった英文を読んでポイントをつかみ、それに関する意見を英語で書いたり、クラスメートとディスカッションしたりする。 外国映画の一幕をグループで分担して演じ、発表会を行う。

※機器やソフトではなく機能で考える。同じ機能が果たせるのであれば、より原初的な教具に戻して考えてみる。

テクノロジーを生かしたイノベーションというとき、効率性志向の既存の作業や生活のスマート化のみならず、教科の専門性と結び付けて学びの質を高めたり、社会的活動と結び付けてフラット化や民主化につなげたりする視点も重要だろう。

研究内容Ⅱに係る全体授業研究の概要について　　令和８年 11 月 13 日（金）

糸島市立志摩中学校

１　研究内容Ⅱと主題研究とのリンク（前段）

本校では、文部科学省等からの指定事業に基づき、「研究内容Ⅱ：各教科等の授業時間短縮に応じた授業におけるカリキュラム・デザインの在り方」を研究課題として位置付けている。

研究内容Ⅱを全校体制で推進し、単なる「授業時間の短縮」にとどまらない質の高い教育課程を編成するため、校内で行う「主題研究」と緊密にリンクさせて研究を進める。今回の「全体授業研究」は、この研究内容Ⅱの趣旨を主軸に据えた「主題研究」の手立てを実証・検証する実践の場として実施した。

２　全体授業研究の目的

（１）主題研究（研究内容Ⅱ）における授業モデルの検証

授業時間短縮に対応したカリキュラム・デザインにおいて、「真正の課題」を用いた授業展開が生徒の主体的な学びを担保・促進できるかを実証的に検証する。

（２）45 分授業を成立させる「真正の課題」の抽出・精選プロセスの解明

時間的制限の中で学習の質の向上を図るため、単元の中で学習内容を絞り込み（Less is more）、生徒にとってより深い学びにするためにどのような「真正の課題」を設定すべきか、研究部会との協働的な指導案作成を通して手法を体系化する。

（３）研究開発学校関係者等の外部視点による客観的評価と助言

指定研究としての妥当性や精度を高めるため、外部の有識者及び研究開発学校推進するための関係者から専門的な指導助言を得る。

（４）定例の教科部会と連携した実践の波及

研究授業で得られた５分短縮授業へのアプローチや単元構成のノウハウを定例の教科部会へ持ち帰り、各教科の日常的な授業（教材）研究へ還元・定着させる。

３　全体授業研究に係る動きの流れ

（１）事前の取り組み

① 主題研究の概要に関する研修会の実施

→ 文部科学省指定に関わる「研究内容Ⅱ」とリンクした主題研究のねらいや手立てなどの理論、及び３か年計画で段階的に推進していく見通し等を全教職員で共有した。

② 研究部との学習指導案作成と事前協議

→ 授業者を中心に研究部との協議を実施。45 分という制限時間の中で生徒の深い学びを引き出すため、「真正の課題」との出会わせ方やその手立て、事前・事後学習との連動、指導過程の精選に重点を置いた単元計画や本時の学習過程などを作成した。

（２）当日の取り組み

① 公開授業の実施

→ 全教員が参観し、福岡県授業参観シートを活用して見取りを行った。問いの精選度、45 分の時間配分、生徒の思考や対話の深まり等、主題研究に即した検証ポイントに焦点を当てて参観した（**資料１**）。

→ 本授業には、研究開発学校に関わる指導主事や有識者等の関係者を招聘し、指定研究の文脈におけるカリキュラム・デザインの成果と課題を外部の客観的視点から把握した。

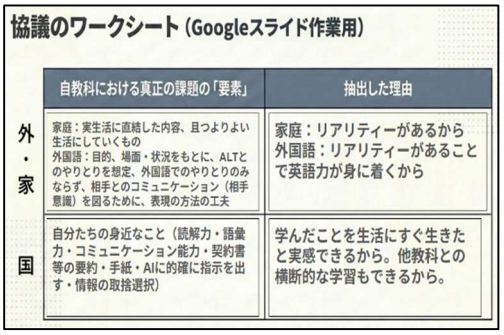


【資料１】授業参観の様子

② 事後検討会（全体協議）

→ 事後検討会では、研究主題・副主題に焦点を当てたグループワークを実施（グルーピングは基本的に各教科部会単位）。

→ 参加教員が、本時（数学科）で扱われた「真正の課題」を参考に、各教科の特質に応じた真正の課題の「要素」（現実社会との関連性、生徒にとっての切実さ）やなぜ、その課題を抽出したのかという理由について交流・表現する活動を展開した（**資料２**）。また、その際、招聘した研究開発学校関係者に各グループワークに入っていただき、直接指導助言を得た。



協議のワークシート（Googleスライド作業用）

	自教科における真正の課題の「要素」	抽出した理由
外・家	家庭：実生活に直結した内容、且つよりよい生活にしていくもの 外国語：目的、場面・状況をもとに、ALTとのやりとりを想定、外国語でのやりとりのみならず、相手とのコミュニケーション（相手意識）を図るために、表現の方法の工夫	家庭：リアリティーがあるから 外国語：リアリティーがあることで英語力が身に着くから
国	自分たちの身近なこと（読解力・語彙力・コミュニケーション能力・契約書等の要約・手紙・AIに的確に指示を出す・情報の取捨選択）	学んだことを生活にすぐ生きたと実感できるから。他教科との横断的な学習もできるから。

【資料２】グループワーク時の作成物

（３）事後の取り組み

① 定例教科部会でのリフレクションと還元

→ 全体授業研究・事後検討会で明らかになった知見（真正の課題の設定と、それに出会わせる手立て、45 分枠での有効な学習活動等）を定例の教科部会に持ち帰った。

→ 自教科における日常の 45 分授業の単元計画（カリキュラム・デザイン）に反映・再構築し、学校全体の研究指定の達成に向けて実践を継続している。

→ 研究発表会での公開授業１（５教科＋実技１教科）の学習指導案作成は、公開授業者を中心に据えつつも、基本的には教科部会が主体となって作成・練り上げを行う体制ができた。

４　成果と今後の方向性

（１）成果

① 指定研究を軸とした主題研究推進体制の構築

→ 文部科学指定等の「研究内容Ⅱ」に主題研究の方向性を揃えたことで、全教員が明確な課題意識を持って授業改善に取り組む構造が整った。

② 「真正の課題」を通じた時間の精選と授業の質的転換への足掛かり

→ 事後検討会において「真正の課題」の要素やその抽出理由を交流したことにより、授業時間を短縮しても「核となる課題」を精選することで、生徒の主体的な学びが十分に成立することが確かめられた。

③ 外部専門機関・関係者との連携深化

→ 研究開発学校推進の関係者の招聘したことで、本校の取組に対する客観的な評価と、今後の指定研究推進に向けた質の高い示唆を得ることができた。

（２）今後の方向性

① 全教科・全単元へのカリキュラム・デザインの波及

→ 全体授業研究で得られた成果モデルを各定例教科部会に還元し、年間を通じた日常の 45 分授業の単元再構成へと波及させる。

② 学習の質と定着度の検証

→ 時間短縮に伴う学力の定着や生徒の主体的な学びの変容について、パフォーマンス評価や振り返りシート等のデータを継続的に収集・分析し、指定研究の報告に向けたエビデンスを蓄積していく。

授業を公開する各教科における単元及び授業デザインの考え方について　令和８年 11 月 13 日（金）

糸島市立志摩中学校

研究開発課題（多様な個性や特性、背景を有する子供達を包摂する柔軟な教育課程の編成 ～一人一人の興味・関心に応じた学びの充実のための弾力的な教育課程編成～ ）の解決に向け、教育課程内で行う授業（45 分授業）の在り方を究明する（研究内容Ⅱ）。そこで、本年度より校内研究主題を「主体的に学ぶ生徒の育成 ～各教科における「真正の課題」を取り入れた単元構成の工夫を通して～ 」と設定し、本校の主題研究と関連付けた。本研究主題の１年目としては、各教科において「真正の課題」を設定することとした。その理由としては、「真正の課題」を設定することで、すべての子供達が学ぶ意義や必要性を実感しながら、主体的に学びに向かうことができ、VUCA 時代を生き抜くために必要な資質・能力の育成につながると考えた。そこで、各教科でめざす主体的に学ぶ生徒の姿と、そのための授業づくりにおける工夫を「教科における単元や授業デザインの考え方」として設定し、以下に示す。

	教科でめざす主体的に学ぶ生徒の姿	教科における授業づくりの工夫
国語	単元における学習課題の目的・場面・状況に応じて、文章の内容や構成、表現の意図に着目しながら、自分の考えを形成・再構築し、目的に応じて適切な言語表現を選択して伝えようとする生徒	○　言葉の選択や表現の違いに着目できるように、作品の情景や心情を自分の感性と結びつけて読み深める場面を設定する。 ○　言葉の選択による印象や意味の違いを捉えることができるように、複数の表現を比較する場面を設定する。 ○　言葉の価値や多様性、時代による変化への理解を深めることができるように、具体物の提示を行う。 ○　言語文化への理解と自分の考えを適切に言語化できるように、教材の特質を生かした単元構成を工夫する。
社会	単元で設定した学習課題に対し、社会とのつながりに着目しながら、社会的事象を多面的・多角的に捉え、他者との対話や批判的吟味を通して、根拠ある「最適解・納得解」を導き出し、自ら社会と関わり続けようとする生徒	○　社会的な見方・考え方を働かせながら自らの考えを構想・構築できるように、生徒にとって切実感のある「真正の課題」を単元における学習課題として設定する。 ○　社会的事象を多面的・多角的に考察できるように、適切な資料の提示や複数の視点をもてる学習活動を設定する。 ○　自分の考えを批判的に吟味・調整・再構築できるように、発問の工夫や他者との意見交流を通して他者と協働的に探究する場面を設ける。 ○　学びを社会への参画につなげることができるように、形成した「最適解・納得解」を社会への提言や成果物として表現する学習活動を位置付ける。
数学	学習課題を解決する過程の中で、数学のよさを知り、数学と実社会との関連についての理解を深め、数学を生活や学習に生かそうとしたり、事象を論理的に考察し、数学的な表現を用いて簡潔・	○　日常生活や社会、数学の事象から問題を見いだすことができるように、数量や図形、関係に着目して数学化する場面を設定する。 ○　数学的な表現を用いて自分の考えを説明し、伝え合うことができるように、考えを表現・交流する場面を設定する。

	明瞭・的確に表現しようとしたりする生徒	○　解決方法や結果、自分の考えを改善することができるように、解決過程や結果を検討する時間を設定する。 ○　既習の知識や技能と関連付け、統合的・発展的に考察できるように、新たな問題の発見・解決へとつながる真正の（単元における）学習課題を設定する。
理科	単元で設定した学習課題に対し、自然の事物・現象の変化や規則性に着目しながら根拠をもって予想し、課題解決に向けて観察・実験を計画し進んで調べ、結果を根拠に考察し自らの考えを見直し、新たな課題を見いだそうとする生徒	○　学習への関心を高め、自分なりの問題意識をもつことができるように、日常生活や社会に関連した事物・現象を学習課題として設定する。 ○　見通しをもって観察・実験に取り組むことができるように、自分なりの予想を立てる場面を設定する。 ○　目的意識をもちながら、根拠を基に考察できるように、観察・実験の目的を明確にし、探究する時間を確保する。 ○　観察・実験の結果を基に考察し、学習内容への理解を深め、新たな問題を見いだすことができるように、次の学習課題へとつながる単元計画を構成する。
保健体育	運動の特性や心身の機能・健康課題に着目し、自己や成果の状況に応じた課題解決に向けて合理的・効果的な方法を工夫しながら、仲間と協働して運動に親しむとともに、健康な生活の実践に向けて主体的に取り組もうとする生徒	○　学習の目的や価値を実感できるように、実生活に結びつく「真正の課題」を設定する。 ○　生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、日常生活における運動やスポーツとの関わりを考える場面を設定する。 ○　健康の保持増進に向け、よりよい生活習慣を考えることができるように、自分の生活を振り返り、考察する場面を設定する。 ○　自分に合った課題解決の方法を見いだすことができるように、他者との対話や試行錯誤する時間を確保する。
外国語	単元における学習課題にあるコミュニケーションの目的・場面・状況に応じて、文化の違いや社会や相手との関わりに着目し、表現等を工夫しながら自分の考えを形成したり、伝えたりしようとする生徒	○　学習への関心を高め、自分事として考えることができるように、生徒にとって身近な問題を学習課題として取り上げる。 ○　英語を用いて伝え合う目的や必要性を実感できるように、英語を用いる必然性のある言語活動を設定する。 ○　自分の考えを形成し、表現することができるように、必要な知識や情報を得るインプットの時間を確保する。 ○　自分の考えを相手に伝え、伝え合う力を高めることができるように、インプットとアウトプットの時間を単元の中でバランスよく確保する。